

層富

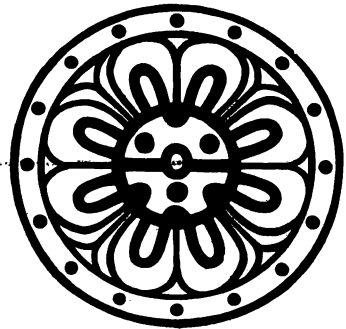
(川口勇吾)

会誌名「層富」(そほ・そふ)の由来

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は、古代には「層富」または「曾布」「添」とも記され、「倭六県」(やまとのりくのあがた)の一つでありました。出典は『日本書紀』の神武即位前紀己未年の春2月壬辰朔辛亥(20日)の条にみえる「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく、あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌名としました。ご愛顧の程を。(綱干善教)



会章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ、単純な円形にまとめ、音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも、二人三脚で楽しんでいるようにも見えます。

(基本デザイン 朱雀・寛裕)



大和路見学会

層 富

一九九四年

第十一号 目次

巻頭言	網干 善教	1
倉衛城跡の発掘	網干 善教	2
漢詩	片桐 一夫	6
私の歩んできた道	網干 善教	7
短歌		10
お遍路	吉田 篤史	18
閑話休題	廣田 好實	20
「悪魔」考	木村 長子	23
「孤独からの出発」	牧野 自然	25
俳句		27
グループからの便り		34
第十一回文化祭 記録		77
一九九四年度総会 記録		83
会則		89
役員名簿		92
組織分担		93
会員名簿 (巻末から 逆ページ)		107

『舍衛城跡の発掘』

関西大学教授 網干善教

関西大学では一九八五年度から八八年度の三年間にわたりインド共和国ウツタル・プラディシユ州シユラヴァステイにあるサヘート遺跡の発掘調査を行い、わが『平家物語』の冒頭に『祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり』とかかれたあの祇園精舎（サヘート）の遺跡の出土を見た。

主としてクシヤン朝からグプタ朝にかけての大規模な沐浴池、仏塔、寺院や僧院跡をはじめ、テラコッタの仏頭など多量の遺物を発掘し、祇園精舎の一部を明らかにすることができた。

引続き一九九一年度から曩と同じく文部省の国際学術研究補助金の交付をうけてインド政府考古局と共同発掘調査にとり組んだ。このたびの発掘はさきのサヘート遺

跡の北約五〇〇メートルに位置し、紀元前から繁栄を誇ったインド北部最大の古代都市であった舍衛城であり、マヘートと呼ばれていて、漢訳仏典に舍衛国と記されている遺跡である。

サヘート・マヘートは今述べたように五〇〇メートル位しか離れておらずマヘート（舍衛国——国とは城、都市のこと）の中に、祇園精舎（サヘート）が含まれているのであって、仏典には祇園精舎をいう場合、「舍衛国祇樹給孤独園」という。この最初の「祇」と、最後の「園」という二字を以て「祇園」というわけである。（祇は祇陀太子、樹は木、給は与、孤独は独りで、かつて舍衛国（城）が栄えた時代に祇陀太子と須達長者の寄進によって祇園精舎が建立されたいわれの表れとされる）。

祇園（インド語でジュータバーナ）といえは、わが国の京都の祇園祭が連想される。斉明天皇二年新羅の牛頭山にとどまっていたスサノオノミコトの神靈を愛宕郡八坂郷に祭り、一般に祇園天神といわれるようになったのは、八六九年播磨広峰神社から牛頭天王を勧請し、祇園天神堂といった頃からであるが、更に承平四年猛威を振った疱瘡の災厄を懼れた藤原基経が、かたわらに薬師堂を建てて祇園寺と呼んだ。これが承久二年焼失したので仮宮を祇園天神堂の西側に設け、やがて合せ祭るようになったため混同して祇園といわれるようになった。この祇園寺が明治の廃仏毀釈により八坂神社に改まったのであるが、建物は寺院形式の佛を残している。妙楽寺が神仏分離により談山神社となったあとも、今尚塔を残しているのと同じで神仏習合と分離の沿革の跡である。

祇園信仰のこのような歴史は、遠く古代我国に将来された仏教とともに入った経典、教義や仏法の普及浸透によって起る国歩の記録化、即ち歴史書に於てその由来淵源をとどめて今に伝えられている。

(一) 仏教の伝来と祇園

『日本書紀』欽明天皇十三年百濟の聖明王が釈迦仏の金銅像一軀・幡蓋・經論若干巻を獻る。

『敏達紀』六年十一月、百濟国の王、經論若干巻の外、律師・禪師・比丘尼等六人を獻る云々。

『推古紀』十四年七月、勝鬘經を講かしむ。又法華經を講く。天皇大いに喜び、播磨国の水田百町を皇太子に施る。

『日本書紀』が伝えるこれら多くの記事は、仏法東漸の勢力が年々盛んになり、将来された経典によって飛鳥・奈良の頃には「舎衛國」や「祇樹給孤獨園」の名が、夙に知られていたであらうことを思わせる。『過去現在因果經』や浄土信仰の根本経典『仏説阿彌陀經』などにより、祇園の認識、観想、信仰が当時の人々に根づいていったことと思われる。

(二) 舎衛國

『孝徳紀』白雉五年、吐火羅國の男一人、女二人、舎衛の女一人、風に被ひて日向に流れ来れり。

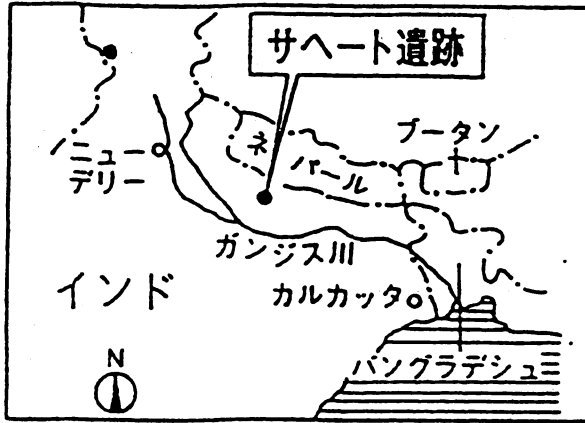
『斉明紀』三年、五年、六年の條や、『天武紀』四月の

記述は、舍衛の国及び当然のことながら祇園精舎について、当時の日本人が知っていたであろうことをうかがわしめるのである。

さて、今次発掘した舍衛城跡はヒンドスタン平原北部

ネパール国との境に近くガンジス川の上流ナウクハン川の旧河道の右岸、幅一五メートルから三〇メートル、高さ一〇メートルから二〇メートルくらいの土壘（城壁）に囲まれており、東西約二キロ、南北約一キロ、面積一・五四平方キロ、城壁の長さ約五・四キロの三日月形の地形である。

舍衛城は古代「室羅伐悉底（シラヴァステイ）国」とも呼ばれ、ガンジス川中流のコーサラー国の首都であったが、その盛衰は激しく、四〇四年頃ここに駐錫した僧法顕は、この都市が既に荒廃して



いたことを記し、また、七世紀中葉、天竺への旅に立寄った玄奘三蔵は『大唐西域記』に、「都城荒蕪」と述べている。星移り物変り千五百年、今日広大な城内は一戸の家もなく、叢林静まりかえって法顕、玄奘の見た寂莫は、愈々深々と広漠の天地を支配している。

しかし、それだけに至るまで開発に侵されることなく世界の古代都市のうちでも考古学の調査究明に最も恵まれている地域なのである。

城内に「太陽の池」と呼ばれる径三〇メートル位のまん丸い池がある。水の出口も入口もない池で、まわりは高台となり、はるかなる昔は、この高みに上流階級の楼台が点々としていたことと思われ、建物遺構がある。

発掘調査はこの池の南西の位置に設定した基点から日本隊は東及南に、インド側は北方向へ、相互

に連繫を保ちつつ掘り進めた。私ども日本隊はことさらに層序中に建物遺構がないと推定される地点を選んで、深さ四乃至五メートル掘り下げ、層位的な遺物の検出と、紀元前に遡る遺構の確認を目的として調査した。

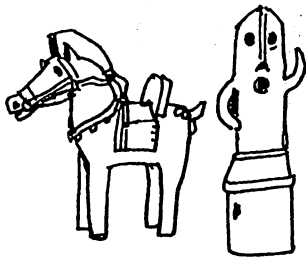
待望の前四乃至六世紀と思われる北方黒色磨研土器と一緒に、建物遺構や土壌も出土したが、今回の調査で一つの問題としたのは、この時期の建物が太い掘っ立て柱を用いた木造建築であったこと、即ちレンガや瓦が用いられなかったということである。これに関連して上記の法頭が「祇園精舎に七階の建物があつて修行の道場になつていたが、ある時嵐が燈柱を倒し、それが幡に燃えうつつて建物が焼失した」との伝承を記しているが、今回の出土遺構が、同じく出てきた土器から前五〜六世紀に遡るとみるならば、あのサヘート即ち前回調査した祇園精舎の、ありし日の壮大な七階の建物も木造なるが故に、焼失したのであるという可能性が出てくるわけである。

発掘した土器既に十萬点、大量の土器、仏像破片、玉類等であるが、今回北方黒色磨研土器と、同時期の建物遺構を検出したことは、祇園精舎で釈迦が説法された時代迄、考古学が遡り得たというわけで今後の調査に明る

い見通しを与えるものであった。

前回発掘した大規模の沐浴場の修復と保存の工事は、その後インド考古局の手で始まり、州都ラクノウから舎衛城・祇園精舎への道路約百八十キロの拡幅も日本の開発援助(ODA)によって着工されている。

(講演後 スライド上映)



【漢詩】

詠史（歌舞公孫）

片桐 一夫

歌舞公孫美少年
嬌聲廻合掖庭筵
平城貴胄正瀟灑
作禮閑辭宮女前

歌舞の公孫、美少年
嬌聲廻合す、掖庭の筵
平城の貴胄、正に瀟灑
作礼閑かに辞す、宮女の前

捧心師兄

哀惜陣亡年歲移
李瓜遺訓耳無離
春風杏李花開夜
願賜音容夢舊時

陣亡を哀惜し、年歲移る
李瓜の遺訓、耳離るる無し
春風、杏李、花開くの夜
願はくは音容を賜り旧時を夢みる

私の歩んできた道

考古学への二人の恩師

網 干 善 教

私が今日までとにかく考古学研究の道を歩むことができたのは、数多くの先生方がいて下さったり、先輩や同僚あるいは共に頑張った学生諸君がいたりしたお陰であることは、いうまでもありません。

それはそれとして、私をはじめ考古学と出逢ったこと、一人の考古少年を傍において単に考古学の分野のみならず、人間的にも育てて下さった直接の恩師が二人いて下さったことに感謝しています。その一人はいうまでもなく故末永雅雄先生ですが、もう一人は故日色四郎先生でした。この二人の先生と出逢い、その導きによって考古学の道を歩むことができたのです。ところで、末永先生と私の関係は新聞や雑誌などでも度々紹介されていますが、日色先生とのことはあまり取り上げられていませんので、ここでは私が師と仰ぐ一人の恩師日色四

郎先生のことを書いておきます。

私が飛鳥島庄（現高市郡明日香村島庄）にある有名な石舞台古墳の下にありました高市尋常高等小学校（現在は校舎は残っていません）の六年生を卒業したのが昭和十五年の三月でした。そして四月に奈良県立歌傍中学校（現歌傍高等学校）に進学しました。

ところで、入学してすぐ気がついたのは、当時歌傍中学校に「徴古室」という教室がありました。すなわち現在流にいうと一つの教室なのですが、考古学の博物館のようなものであり、クラブ活動の教室のようなものでした。今から考えてみますと不思議なことです。なぜなら、その頃は日本が皇国史観のもとで戦争へ戦争への途を歩んでいました。その基本的な考え方は肇国の精神として八紘為宇であり、皇統連綿と続くとする天皇の国であり、

その天皇は神であり、天孫降臨以来、神聖にして侵すことのできない地位でありました。ことに日本の建国の地として伝承されてきた橿原・畝傍に所在する学校として、もろに中枢的な役割を担ってきた学校に、皇国史観とは全く異なる実証主義の考古学の研究が行われていたことは、二重構造的のようであり不思議なことでありました。

しかし、それには歴史の流れがあります。明治、大正、昭和と明治維新以来行われてきた旧「大日本帝国憲法」の近代教育と称されるものなかに、皇国史観を基とする帝国主義的な教育とは別に、合理的、科学的な研究や教育が行われていました。考古学もその一つの分野でありました。

当時の畝傍中学校にもそれなりの理由がありました。それは、日本考古学の泰斗でありました高橋健自博士が、若き日この学校に奉職されていきました。そして高橋博士の薫陶をうけて考古学研究者が輩出し、よき伝統が創られていきました。そうしたなかで開設されたのが「徴古室」であり、高橋博士以来の先輩たちの収集品が収蔵されていたのです。生徒たちはこの部屋に集まって考古学の勉強をしていたのです。

入学をして間もない頃、私はこのことを知り、早速部屋に行きました。そこにおられたのが顧問の日色先生だったのです。その時部屋には、先生は一人でしたので、いろいろ話しているうちに、「来週の日曜日に橿原考古学研究所に行くから一緒に行かないか」と言ってお下さいました。早速約束をして先生におともして橿原考古学研究所へ行くと、そこに所長の末永雅雄先生がおられて、「君の家はどこか」と尋ねられたので、「私は石舞台古墳のある島庄です。先生が発掘調査をされていました頃、私は父に連れられていつも見学に行っていましたので先生を存じ上げています」といいますと「ああそうだった。いつも父に連れられて小さな子供が来ていたなあ。もう中学生になったのか。考古学を勉強したければ、ここに来てよらしいから」といって下さいました。大変感激して、それから時間があれば研究所に通い末永、日色両先生の指導を受けることになりました。

日色先生は西洋史担当の先生でありましたが、師範学校を卒業してしばらく小学校の訓導をされていたが文検を見事合格され新潟県立高田中学校から昭和二年三月、奈良県立畝傍中学校に転動されました。私は昭和二年の

九月生まれであるから、それ以前に着任されていたこと
になります。

日色先生は奉職されながら、当時国民精神文化研究所
に属され、国史学の泰斗であった京都大学の西田直二郎
博士の教えを受けられていました。そうしたことがあつ
て、クラブ活動「考古学部」の顧問をされていたとい
うことです。

昭和十三年の秋から本格的に開始された橿原神宮の拡
張整備工事で、橿原遺跡が見つかり、その発掘を末永先
生が担当されることになり、日色先生がお手伝いされる
ことで、橿原考古学研究所に通われていたのです。その
後、中学生の私は末永・日色両先生について奈良県各地
の調査や見学についていくことになりました。日色先生
は終戦後、県立南葛城農学校、県立桜井高等学校、そし
て御所市立御所中学校長に就任されましたが、昭和二十
九年五月三日、県立医科大学付属病院で御逝去になりま
した。その間研究されました古代の井戸についての成果
が遺稿として残っていましたので、私たちが相寄り『日
本上代井の研究』と題して出版いたしました。

私は幸いにも、考古学の研究にめぐまれたなかで勉強

することができました。私が子供の頃石舞台古墳の近く
で育ち、行われていた発掘調査を、父に連れられて見学
したこと、そして県立歌傍中学校に入学したこと、その
学校は考古学の研究が盛んであったこと、日色先生がお
られたこと、先生に橿原考古学研究所に連れていって
もらったこと、その研究所の所長が末永先生であったこと
などの、偶然とも思えるような因縁によって、考古学の
途を歩むことができたことになりました。若しこのなか
で歯車が一枚でもかみ合わなかったならば、私は別な人
生を歩んでいたかも知れないと思うことがあります。そ
うしたことからはすでに亡き両先生の学恩に深く感謝
したいと思います。



【短歌】

春夏秋冬

寛

裕

白々と十余り開くひめしやは灯る光を梅雨空に掲ぐ

雨季明けの舗道に蟻の群るる見れば蟬の骸を運びゆくらし

野球すみ夏祭り過ぎ何となき空洞を抜けゆく風は秋の気

外灯とネオンの色を返しつつ夜のカーポートに車ら眠る

責負わぬものとなりゆくわが顔に今宵シエービングの泡を立ており

呆けしと風聞ありて棲み捨てし媪の庭に柿は熟れゆく

いろどりの秋たちまちに消滅し底ひを擲う色なき風雪

体調を保つ炊き出し一碗の粥の米なき釜が崎が映る

焼きあとを濃くして枯色の面を伏せ若草山は春待つらしも

枯枝に差したるみかんの片々に今朝も目白の来てつえばめる

八十路の友

宇野木 久代

若若し八十路の友は壇上で日日充ちたりて輪を広げ行くと
色色の輪に入り遊び充ちし日を八十路すぎしも幸福と語る

壇上に登りし友は若若し優しく強く八十路なれども

雨の日も飢えしのぐらし小鳥らは羽根ふるはせて餌をついばむ

ぼんやりと春雨の中枯れすすき灰色に見ゆ野辺の空気は

ピアノ

大浦 小枝子

指触れば五十年間とび去りてピアノ習ひし teenage となる

眼は楽譜両手は鍵盤右足はペダルをと老いは四苦八苦する

四分音符を八分音符のごとく弾き「おけいこすんだ」と子は走りゆく

早く弾く子に「もう少しゆっくり」と連弾せねばならない老いは

やうやくに気がつく齢か弾きはじめ楽譜かすめり眼鏡ちがへて

いつの日嫁ぐや

岡田越子

残りいし彈丸たまを頭蓋づがひより取りし義兄あには僕の戦後は終れりと云ふ

苦しみはその日のうちに忘れ去り明日を迎へむ樂しかるべく

着物よりリフオームせし服を展示すれば知らぬ人より電話嬉しき

次々と買ひ求めたる娘の晴着いつの日嫁ぐや想ひめぐらす

「返事しろ」さがせる本のみつかりて思はずさけぶ本に向かひて

惜別

木庭和子

苦樂拵げて歌に詠むわれら洒脱なる君の言葉に笑ひさざめきし

たわむれの言葉に深くかくされし君のいましめ再び聞けずや

先導の降りし小舟の心細し漂ふ彼方いづちとも知らず

あまたたびまみゆる日あるをおもへどもにじみてみゆるさび色の山なみ

(さび色で描かれた山の転居通知を頂いて)

春と共に別れし人に幸あれと祈りて閉づる歌会の頁

虹鮮らけく

久門 富美

趣味の輪を広げ過ぎしを常悔くれば老化の癒ゆる葉はなきかな
飲み干してカッブをおけば紅のあと拭ぐふも消へぬ女の性見る
駆け抜けて視ずに過せる人生の「おんな」の部分を読み直してゐる
生と生をたしかむること人寄りて喪服の笑みをしづかに交はす
八十路過ぎ未だ輪廻に惑ふ目に虹鮮らけく天懸けわたる

老二人

沢田 実子

キュウイの小枝しつかと抱きつつ命を終えしカマキリ哀れ
砂浴びの小鳥の声に目覚めいてうとうとまどろむ朝寝楽しも
老二人語ることなく時の過ぐテレビドラマの対話響きて
切り詰めしバラに日差のやわらかく芽吹き初むか紅き点見ゆ
外米のとき汁花に注ぎつつ今日の夕餉の味はいかにと

惜春

玉置小代

ウインドーに並ぶスーツの色淡く春の気配にふと立ち止まる

北風が日すがら吹きし裏庭に落のたう摘む小さきよろこび

白牡丹「私が主役」と春の陽に花びら広げあでやかに彩ふ

それぞれの定めに生きるはらからが母をかこみて卒寿の宴

無情にも終日ふりし雨風で吾が家の庭の春は終りぬ

季節の流れ

中川 都哉子

ぼっかりと明かりの如く紫陽花の咲きいる露地を通り過ぎにき

わくらは葉にならんとしつつ花みずきこの秋の陽の優しき日々に

晩秋の風飄々と街を往く心もとなきわれを置き去り

長城の雲しろじろと漂泊の地にあるおもひわれを充たしき

早春の鏡に向かひきらきらとシヨートカットの十八歳が立つ

ひとひ
一日の花

故永谷敏子

街路樹は裸の枝をつき出して次なる命青空に見す

雑草も眉目良き草は抜き難し小花はやさし春の良きもあり

美女柳一日の花よスケツチのペン急がせる雨の来ぬ間に

蜘蛛の巣の皆それぞれに獲物あり手入れせぬ庭かがみて通る

育て来しカサブランカの花つぼみ咲きたる順に今朝も枯れゆく

笑顔愛らし

藤原香

来賓の我も心に止めおく感銘深き卒業のはなむけ

春来ればよもぎつくしの宝庫なる隣の空地にアパートの建つ

背を丸め老婆姿の日常もダンスの時は背筋をのばす

八重桜吹雪となりて忽ちに玉ネギ畑をピンクに染めぬ

家さがし尋ねあぐねて少女に問へばうちですよとて笑顔愛らし

秋の日

松尾 すみ子

老友を見舞ひて哀し幻覚の症状になすすべもなく別るる

花の苗届けてくれし友逝きて「のうぜんかづら」は形見と咲けり

お供への盆の馳走も思ふまま出来ずになりて老を佗びしむ

東福寺の紅葉にカメラ構えたる老の背丸く秋の日は照る

万青の婦人の集ひもいつしかに灸をすえあひ笑ひざざめく

折にふれて

松村 せつ子

やわらかに障子を通す秋の陽よ三井の書院に香のただよう

人恋し電話をかけて声を聞く夫出張の独居の夜

喜々として若葉マークで街走る夫を駅まで送りし吾は

いつしかに赤き実うせて寒々ともちの小枝にひよ止まり居る

雛祭りいくつになるも華やぎぬ押絵のひなと桃をかざりて

尾瀬広野原

山崎 たみ子

高山の短き夏を彩りて小花咲き満つ尾瀬の広野に

郭公やうぐいすの声冴え透る大気清しき尾瀬の湿原

眠れざる尾瀬山小屋の夜の闇に花の群落眼裏に描く

北山杉の並び立つ尾根歩みきて心素直になりゆく如し

己が意のまままつすぐに生き難き人の世思う杉木立の中

薬師寺の塔

棉源 瑛

冬枯れの薬師寺の境内寒風に耐えてひともと早咲きの梅

いくそたび誦してあかずも竹柏の大人うしの詠みたる薬師寺の歌

水煙のかなたに仰ぐ雲に誦しまた歌碑に誦す薬師寺の境内

西の京香き歴史と美を籠めし薬師の像の見飽くことなし

荒れ果てし堂に吉祥天画像説きし若き日の高田好胤師

お遍路

吉田篤史

生老病死、の四苦に愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五温盛苦、を合わせて八苦は、人間として生まれた者が背負わねばならぬ宿命である。

釈迦はそうした人間の苦しみを救う為に、出家して、苦行の末、ブツダガヤ、菩提樹の下で悟られた。二千五百年以前のことである。

『層宮』五号に、私の歩んだ人生を掲載して、その内容に四国八十八カ所霊場の巡礼の事にも触れた記事があります。その後も毎年団参を続けている。

あちこちの霊場を巡拝して行くことを、巡礼と呼んでいる。日本では西国三十三カ所、坂東三十三カ所、秩父三十四カ所の観音霊場、合わせて百観音巡拝が名高く今も盛んである。その霊場めぐりの頂点にあるのが、スケールからいっても四国八十八カ所ということになる。

巡礼はインドで起こったのが最初で、釈迦の四大聖地のルンビニー（誕生地）、ブツダガヤ（修行成道地）、鹿野苑（初説教地）、クシナガラ（入滅地）への巡礼がそれ。

さて遍路とは四国八十八カ所を巡拝する人のことで、西国や坂東を巡拝することを、遍路とは呼ばない。遍路は四国に限られている。今でも四国では『お遍路さん』と呼び、特別な親しみをもってむかえている。

遍路の始まりは、衛門三郎が元祖と伝えられている。

衛門三郎は伊豫の国の長者で、その門前に乞食僧が立っていたが、彼は無類のケチですげなく断り、八日目には僧の差し出す鉄鉢をホウキで叩き割った。鉄鉢は八つに割れて散った。すると翌日から八人の子が次々と死んだ。三郎は『あの僧が空海上人だった』と悔い、懺悔したさに大師のあとを追って、八十八カ所を巡ったが、大師に会



えない。二十一回目は逆打ちした。そうしてついに、阿波の十二番焼山寺に登る途中にて、まさに力つき息絶えなんとするとき大師に会い、懺悔をし許しを乞う。大師

はいま修行は成就し罪業は消えた。未来の望みはないかと問われたら、三郎は、自分は伊豫の城主河野一族なので、願わくば河野の世継ぎに生まれたい、と答え息絶えた。

大師は「衛門三郎再生」と書いた小石を握らせ、息絶えた三郎を手厚く葬り三郎の杖を墓標に立てた。その杖から芽が出て杉の大木になった。今の杖杉庵の杉の大木は二代目で、「衛門三郎再生」の石は五十一番石手寺の宝物に、子供達の墓は四十七番八坂寺の近く、衛門三郎屋敷跡に番外得盛寺と付近に、八人の子供のお墓の八塚が現存している。目の見えない人が目を開き、足が不自由な人が立ち上がる、医者にも見放され

た不治の病が治ったという類のエピソードはどの寺にも伝わっている。お遍路は江戸時代はもっとも盛んだといわれている。現世と来世の幸せに大きな功德があると信じられて、現在でもお遍路は益々盛んである。

現に松葉杖や、ギブス、手押し車などが奉納されている。これらは患者がその寺まで参り、祈願の結果全快したので不用になって奉納したものである。

信仰にはこうした科学で証明出来ない、不思議な現象

エッセイ

閑話休題

おーい、下宿のおばさんヨー

四十代、部屋で女房にそう呼びかけてこっぴどい反撃に遭った体験を持つ。

わたしを、その程度の存在にしか見てくれてなかった

があるので、信仰の有難さがある。

四国にはまだまだ自然のよさ、即ち四国八十八カ所霊場という、四国全土にわたり、山、川、海、野、ありで誠に恵まれた、世界に冠たる聖地である。良い空気を吸い適度の運動をし、早寝、早起き、快眠、体に悪い筈がない。暇を作って、是非遍路をお勧めする。一度したら、かならずや、「スルメ」の味になる事疑いなし。

(筆者は、四国八十八カ所霊場会公認大先達)

廣田好實

のね——彼女の血相はまるで夜叉であった。

当時、職場の仲間に、「子宝に恵まれない年配の夫婦がいた。夫婦はお互いに「下宿のおばちゃん」「ハイよ、学生さん」と呼び合ってむつまじかった。人もうらやむ

仲だった。畏敬とあこがれを持ち、まねをしたのが失敗のもとだった。

あれから四半世紀。いま女房は「下宿の……」呼ばわりしても素直に受け答えしてくれる。男对女のぬめりが減じたせいかもしれない。

そのおばさん（いや、もうおばあちゃんだ）が、台所で珍しく鼻唄を歌っている。聞くともなしに耳に入る歌詞をなぞってみる。

〽乃木大将は敵かに 御恵み深き大君の

大 詔 伝うれば 彼畏みて謝しまつる

いやはや懐かしい日露戦争・旅順開城の歌である。大君は明治天皇、謝しまつた彼は敵将ロシアのステッセル。戦前派なら、とくとご承知の小学生唱歌？ である。思考を巡らすうち、肌に乗が立った。大君をどこかの国の独裁者に置きかえ、敗れた側を日本にたとえた場合、果たして歌詞のように、衷心から相手に謝罪できるだろうか。側面に核兵器が見えかくれるだけに。

そのばあさんが、とっぴようしもない「情報」を持ち

込んできた。

皇太子妃と秋篠宮妃の旧姓知ってる？ わかってたら

お二人のフルネームを、縦書きでも横書きでもいいから平仮名で並び書きしてみてください――

ハハーン、当方の呆け進度測定とおいでなすったか！ 即座に『おわだまさこ』『かわしまきこ』と書いて見せろ。

次問。雅子さまの『お』から紀子さまの側に一字ずつ下げて、状に拾い読みし、逆に紀子さまの『か』から同様、状にたどると、どうなると思う？

ぼう然自失！ 二度、三度繰り返すが、ともに「おわだまさこ」「かわしまきこ」は安泰である。☒示すればこうなる（百聞一見に如かず）。



お二人は婚前、東京都民という唯一の共通点を除いて全くの赤の他人だった。何かの星のお導きでいま陛下の

ご長男、ご次男の妻、つまり義姉妹になられた訳だが、それにしてもこの不敬？な言葉ゲームの結末をどう解釈すべきなのか。哲学的な縁の謎を解きあぐねて、その夜は眠れなかった。

それよりも何よりも、この逸品ゲームの第一発明（発見？）者はどこのどなたなんだろう。コンピューターのいたずらとしても尊敬に値する遊び人——つくづく感心する。

ばあさんに代わってじいさんの方。日がな新聞を離さず、本を乱読する。

通勤時、往復の車中で利用したのは専ら文庫本のスパイ小説だった。冷戦下、真実味があった。すぐのめり込め、ラッシュが苦にならなかった。

寝床に持ち込むのは、睡眠剤代わりの硬い内容本で、最近では『考古学』その見方と解釈』など。散歩途中の公園では、中間的な「教養」本。近ごろ緑陰で読んだ『漢字の字源』（阿辻哲次著・講談社現代新書）で意味深長な説と出合った。

婦の字源についてである。時節柄、誤解を招きかねな

い事象なので著者・阿辻さんの原文は（へ）印で囲み、以下、紹介してみる。

女ヘんに帚のツクリが婦。帚は竹カンムリをつけると分かるように、もともとホウキをかたどった文字。つまり（ホウキを手にもった女性ということ、ここからの字はしばしば世の女性解放論者から目の仇かたにされるようになった。曰く、女性を意味する「婦」がオンナとホウキからできているのは、女性を家事労働に縛りつけようとする封建的思想の表れにほかならず、このような作り方をしている漢字はこの男女平等の時代にまことに許しがたい文字であると。）

興味を引いたのは、「しかし」と続いて（へそれは古代中国の実情と当時の文化をふまえていない、いささか浅薄な議論というべきである。）と断じた後章の部分。

〈甲骨文字や殷周時代の青銅器の銘文においては「婦」は当時の王の妃を指す文字として使われている。当時の漢字の使い方では、「婦」とは決して一般の女性を意味するものではなく、「男」と同様に、特定の身分を示す字だったのである。〉

「婦」という字の解釈のポイントは、字のツクリと

なっているホウキの捉え方にある。この場合のホウキは戸外や一般家屋の掃除に使われるものではなく、実は神聖なお祭りをする祭壇を掃除するためのものだった。

〈政治のことを「まつりごと」というように、古代国家では政治と宗教は不可分の関係にあった。祭祀は国家にとってのもっとも重要な行事であり、これをおこなう場所はきわめて神聖なところだった。〉

〈祭祀の場にはお供え物を置く祭壇がある。ここは絶

対に汚れてはならないところである。〉

〈この祭壇のちりを払うときに使ったのが、この場合のホウキなのである。だからこれはきわめて神聖な道具であり、これをツクリとする「婦」は、そのように神聖な職務を担当する非常に地位の高い女性であった。〉

読み進みながら、じいさんのほおが緩んだかこわばったか、それは内証。ばあさんの夜叉面はもうごめんだから。

雑感

「悪魔」考

「悪魔」の命名論議が喧嘩されてすでに久しいが、反応の余韻は相当に長く尾を引いたようであった。

そもそも名前というものは、親が子に贈る最初で純粹なメッセージである。そこには子に対する限らない願望

と、生涯に対する幸せへの親たる者の最高の叡知を絞っての命名ではないだろうか。

まして初めての分身を得た若い父親が、不謹慎にわが子に名前を選ぶとは考えたくない。たとえそれが余りに

木村長子

も異端的で、将来プレッシャーとなるであろうと思われる名前であっても、その発想には不純物はないと解釈したいが、やはり余り極端な印象は、いろいろと問題提起が多いのではないだろうか。

ここに、珍彦（うずひこ）という珍しい名前の某実業家がいる。この名前は「神話に出てくる大事な名前」と、親からその由来を聞いて親を恨むどころか、誇りに思っているとかで読んだことがある。これなどは稀少価値のある良い名前だと私も思う。

因みに手前味噌で恐縮ながら、私の名前も幾分奇名の部類に入るのではないだろうか。「長子」と書いて、「オサコ」と読むのだが、学校時代から先生にもまともに呼ばれた記憶はない。「チョウコ」、「ナガコ」、先生は好き勝手に出席簿をとる。かくして、延々八十年の生涯の間に、ただの一度もストリートに姓名を呼ばれた経験を持たない。

親が付けてくれる名前には必ず何らかの根拠がある。私の「長子」についても、生国は旧南満州大連市であるが、綿密には、当時関東州庁官吏であった父が、長山列島という処に出張中の出生であったので、それにあやかっ

たらしい。長女でもあり、幾分には、人に長じての親ごころも込められていたのではないだろうか。しかしそれは見事に的外れとなってしまったが……。

ところで、「オサ」という語因は、古文にも「うまやのおさ」（宿駅の長）などという読み方も出ているし、近代では「長田幹彦」という小説家もいた。皆「オサ」と読ませている。そう珍奇とも思わないのだが、結構珍しがられるのが珍しい。私も若い頃は自分の名前が嫌いで、「ナガコ」と呼ばれてウンウンと肯定していたが、ここ二、三十年は何故か次第に自分の名前に含蓄を覚えている。

もし「悪魔」君が誕生したならば、果して長じてよりの「悪魔」君は、自分の名前に対して如何なる反応を示すであろうか。

誰でも一つは持っている名前というテーマのために人生が左右されないように、始まったばかりのボクの前途に幸いあれと祈りたい。

（平成六・二・一、わたしの雑記帳より）

「孤独からの出発」

(「弥陀の加護を受け、俳句に支えられて」補遺)

牧野 自然

「層富」の十周年記念号という、大切な紙面を、全く粗末な一文で汚してしまい、一役員として、そして何よりも僧侶として恥ずかしい次第です。末尾に書きました強烈な痛みの中にあつたことは事実であり、合同句集の刊行という、病人にとつては大仕事を控えていたことはありますが、それならばお断りすべきであり、書くときればきちんと纏めて完結すべきでした。そのためには前と同じ位の字数が必要ですが、とくに編集部にお願ひして、今号の末尾にその要旨を書かせて頂いた次第です。

昭和六十年の県政奈良という広報誌に、「孤独からの出発」という私の随想を載せて頂きました。要約しますと、「コンピュータ」という便利なものが普及して、会計、成績等のデータの処理がキー操作で立ちどころに可能になったが、それに頼れば頼る程周りの美しい自然が見えなくなってくるのではないかと述べ、自分の中学時代四年間の療養生活のあと、謄写印刷店に住み込んで夜間中学に通いながら俳句を作った時代に、高浜虚子先生

の厳選に入った数少ない作品が、救い難いような当時の孤独を自然にぶっつけて、自然から与えられたものであることに気がついて、ともすればそれに負けてしまいそうな孤独が実はメリットであることを、俳句からとくに恩師高浜虚子先生から教えられた。高校や短大で私が「孤独は人生の出発点である」という言葉をよく使うのは、この体験に負うところが多い。生徒や学生はその話を聞いた時にはよく理解できなくても、社会に出て壁にぶつかり孤独感を持つと、その言葉の意味が理解できるようになったと書いてきてくれたりする。エレクトロニクス化が進めば進む程、私達の心はいよいよ自然から遠ざかり、いつの間にか孤独になってゆくが、氾濫する映像や、活字がその孤独を隠してしまう。人間が何かを契機として孤独を感じさえすれば、自然がみずからを開示してくれるのではないか」という意味のことでした。

敢えてこの要約を引用したのは、このことが学生時代からの私の考えの原点であり、文化協会発足当初に

計画しました「人生を語る会」のテーマでもあり、合同句集「平城山」「平城山二」のあとがきでも、言外に述べていたことでもあることです。

それにもかかわらず昨年原稿では、肝腎の私自身が強痛に耐えることに気をとられて、孤独ではあっても、そこから「出発」するという姿勢が全く感じられませんでした。五十年間に何度も「孤独」だけでなく、その奥にある「死」を実感して来ましたが、いつの間にかそのことを忘れ、感じてそこに留っていたのでした。

確かに教壇に立ちましても、何らかの機縁で「孤独」を実感しております時は、生徒や学生の反応が違っておりました。前掲の広報誌に書きましたが、私に孤独を一番感じさせてくれましたのは、好んで足を運びました。沢も凍結するような厳冬の木曾山中でした。その時は自分でも手応えのある俳句が得られましたし、それが教壇に向かう私をリフレッシュしてくれました。

まして私は僧職にあります。しかも一切のものを捨てて、東北から九州までの旅に終始し、最下層の人々と野に臥しながら、戦禍に斃れた人々を葬い、ひたすら念仏をすすめ、僅か五十一歳の若さで「一代の聖教皆尽きて南無阿弥陀仏になり果てぬ」と述べられて、すべての著書を焼かれてなくなった、一遍上人の流れを受ける

時宗の僧侶です。宗祖の境地にはもとより及ばなくても、黙って孤独に耐え、そこから出発して、人々のためになることを一つずつ積み重ねて行かなければなりません。常人の半分以下の酸素を吸い、なお起臥相半ばする生活の私には、木曾山中はもとより、近くの石のカタト古墳まで歩いてゆくこともできませんが、本堂の阿弥陀如来にこれまで幾たびも死から引き戻して頂いた加護を謝し、梅雨になってまた戻ってきた強痛の中でも、念仏を唱えることはできます。

今年の節分の日に何度目かの手術を受けました時に、
手術の灯春めく色と思ひ浴ぶ

という句が浮かんで来ました。家内との筆談の便箋に、乱雑な字で書きとめてあったものです。この句を含めて三句が「ホトトギス」の巻頭の次に載っているのを見た時に、私はまた「死」の意識が私に俳句を与えてくれたことを知りました。これからは「病氣」「痛み」などという言葉が、私の俳句に入ることはないでしょう。

「孤独からの再出発」にあたり、この要約のために貴重なページを割いて頂かなければならなかったことを、會員の皆様にお詫びし、その機会を与えて下さった編集部の皆様感謝して筆を擱きます。

【俳句】

手術の灯ひ

牧野春駒く

泉湧わくことに因ちなみし宮居の名
萬緑や神に供へし生玉子
行衣干す青無いち果じ花くに霏うきして
鶏頭の大極きわまりて倒れ伏す
蔵くらぬちに葬具くわきらめく時雨かな
泥田には泥田の色の案山子立つ
手術の灯春めく色と思ひ浴あぶ
手術受く部屋寒からぬことよかり
岡持に運ぶ佛飯ほととぎす
田楽の口を拭ひて退院す

鮎掛

畦を焼く火を止めてゐる歩板かな

伊藤柳紅

うはばみの全身晒し田を渡る

河骨の水の咬く音聞ゆ

鉾稚児の注連断つ所作に合ふ囃子

鮎掛の道ある如く瀬を歩む

別れ霜

上原高美

通院のバスの中にも桃の花

七十路の初夢の吾若かりし

亡き夫と憩ひし丘の梅咲きて

窓開けて目にしむ白き別れ霜

藁苞にぬくめられつつ寒牡丹

ピアノ

大浦小枝子

石棺の蓋に阿弥陀や秋高し

用意せし肴も出さる月の雨

校庭のどんどこに飾外しをり

老いてまたピアノ弾きある梅早し

シクラメンピアノレッスン終えし眼に

旅情

岡良子

スペインの夜店に吾は異邦人

昼寝すはコルクの木蔭土赤し

初蟬をトレドの丘に夫と聞く

夏帽子飛ばす地の果口カ岬

南欧の旅人吾もサングラス

ふらここに

柏木一枝

今朝の秋

喜多まさ

古雛の艶よき顔は変らねど

一休寺指す矢印や蛙鳴く

快方に向ひし知らせヒヤシンス

娘のくれし夏服少し泳手なれど

仲良しのシャツが揃ひてふらここに

あずかりし釣書読みをり留守の宮

饒舌じょうに夕蟬せみ遠くなりにけり

玉子焼ふわりと返す今朝の秋

鶏頭に触れてこぼるる種とを採る

冬紅葉散るを映して道路鏡

屠蘇

川口シズエ

山眠る

木村長子

野菊咲き散り行く鳥のゆくへ見る

名ある山名もなき山も眠りけり

枯木立降り出す雨の音たてて

水取の火の粉を浴びて善女なる

うすうすと眠りの中に除夜の鐘

他人ひとさまの孫抱きあげて桃の花

恙つがなく八十路を過ぎし屠蘇とそ祝ふ

夜桜や晶子の精に逢ふことも

なずながめ粥外は強風吹きすさび

母の日や形見の帯を低く締む

雁の声

袴かむしもの弓勢ゆみぜいそろふ大とんど

彼岸会や杉葉に落す山の水

法師蟬いざむし法難いざむし委細いざむし高札に

拓本を打つ手止まりし雁かりの声

竹を伐きる女人きんせい禁制筆太に

込山山歩

春夕日

鉾建の楔打ち込む槌に雨

水鳥の空にとどまり餌を受く

軸替へてはなやぎぼつと冬座敷

老艶にほど遠くをり着ぶくれて

フェリー出て解も帰る春夕日

南村照栄

女礼者

辻田しま代

花冷の廊下おからで拭く母よ

葭切にころっと忘る吾が戒名

熨斗袋だけ買ひ戻るサングラス

日暮れたる女礼者の乳張りて

鬮雲大津絵値切る人もゐて

今朝の秋

西岡智子

太極拳明けしばかりの紫陽花に

生れし蟬空蟬よりも大きくて

珈琲の渦美しき今朝の秋

登山靴ぬらし露けき野路急ぐ

雛飾る白髪ふえしと思ひつつ

寒波

春浅き湖北の駅の小座布団

蹲る巢の親鳥に雨兆す

手の届きさうな銀河や峡の空

雪平の粥ふつつと寒波来る

自動ドア春着の娘らとすれちがふ

西田 たまみ

夏書

白牡丹揺るる裏庭羨しかり

薔薇剪定つづく遂には坐り込み

萬緑のさ中に和服たたまるる

夜の客に風鈴いよよしきりなる

夕澄みて夏書の墨のよく匂ふ

平井 咲子

遠砧

小春日の玄界灘を越えて来し

わが母校異国にありし薦紅葉

生国で通じぬ言葉遠砧

焼諸屋一の鳥居に荷を下ろす

石榴はぜ白壁低き裏鬼門

西山 佐代子

朧月

秋雨の傘の中なる思案かな

機織りの杼のよく交る冬うらら

福引やまづ手に触れしものを引く

お銚子を二本倒して朧月

陽炎や宇宙のはなし聴きにゆく

藤澤 陽子

秋 耕

釣糸を垂れて葭切鳴かせをり

管崎や秋の海より大鳥居

一坪の秋耕の音厨まで

若草の山なみ見ゆる賀状書く

柚べし吊る水尾の里の難かな

明日へ

歌姫の縞しまの南瓜なまと生れ肥る

燕来くしげすし賀茂川かべりに梳くしげする

さみしくてかつかつかつ歩く春の闇

春泥はるの喪もの靴ぐつばかりとま杉すぎの土間

病ひむ人の心こころ明日あしたへじま薬いすゆる

堀池敏子

牧野和代

櫻 餅

七草しちそうや花はなの咬くはき聞ゆなり

久闊くわの話はなしはつきず櫻餅

手作りの鉛あめ買ひ去りし寺小春

百歳の母誕生日水温む

大矢数いどむ平成西鶴忌

八重桜

新築の祝いわいに添まへし粽ちまきかな

太子妃の宝冠たみぎ光る若葉道

職去りし宴うらの夜や八重桜

うづくまる鹿の目芽木の影映す

作務衣着し外とつ国人や夏の宿

三井サチ子

森田陽子

轉り

うす緑きざす冬芽の活き活きと

春立つと鏡の位置を少し替へ

轉りに機嫌良き日とあしき日と

鶯の一声のみに暮れにけり

花芙蓉古き指輪をはめて立つ

和田 美代子



春 遠からじ

サトウ・ハチロー

「はるは いつくる
いつくるの」

「はるは もつじき
くるんだよ」

包みを かかえて

妹と

語りつ 町から

かえる道

「お山の峰の

あの雪が

すっかり 消えたら

春なのさ」

差して教える

指先に

冬に別れる

日が暮れる

（「サトウ・ハチロー著『少年詩集』」より）



— 文学散歩にて —

グループからの便り

読書会

木庭 和子

読書会の魅力は二つある。一は自分の趣味にかたよらない幅広い読書が出来ること、そしてそれを中に共に語り合えること、二は『文学散歩』春から初夏にかけての気持ちの好い時節、読んだ本の中から選んで、その作品の舞台となった場所へ出かけるのも中々たのしいものである。

井上靖著の「星と祭」に触発されて、琵琶湖に向かって立っていらっしやるという『観音様』を訪ねたり、宇野千代著の「薄墨の桜」をぜひ一度は見たいものと、短い桜の季節、殺人的混雑をもとめせずに電車を乗り継いで美濃の山奥へ。又、降りしきる雨の中バスを駆せて、越前陶芸村行は津村節子の「炎の舞」。「額田女王」は井上靖の作品ながら『紫野ゆき……』の万葉歌の舞台となった憧れの土地、その周辺の近江八幡の古い街並の見

学など、遠藤周作著の「侍」を読んで、時には歩きましたよ
う」と紅葉の季節に柳生街道を剣豪の気分です……いずれ
の場合も大橋先生の御紹介になるその土地の郷土史家や
教育委員の方々の、懇切な御案内があり満足度は倍増す
る。

こうして書いてくると、何だか「読む」ことより「遊
ぶ」ことの方が主体みたいで、内心忸怩だけれど、でも
文学散歩の月は会員がぐっと増えるところをみるとやっ
ぱり魅力の一つにはちがいない。月一回開かれる例会も
至って気楽な雰囲気で、時間の経つのも忘れてしまう程
です。この楽しい語らいの場にぜひ御参加を！

例会の記録

四月 文学散歩

芝木好子著 「豊饒の海」 関係、水郷他

井上 靖著 「額田女王」 万葉歌碑他

五月 常盤新平著 「もゆる心、たぎつ涙」

六月 柴田 翔著 「されどわれらが日々」

七月 色川武大著 「離婚」

八月 渡辺淳一著 「光と影」

九月 山口 瞳著 「血族」

十月 休 会

十一月 林まり子著 「ミカドの女」

十二月 角田房子著 「閔妃暗殺」

一月 小林恵子著 「聖徳太子の正体」 新年会

二月 色川孝子著 「宿六色川武大」

三月 夢枕 獯著 「鳥葬の山」

詩吟の会

大迫きく枝

—— 人生五十功無きを ——

何かを始めるきっかけとは、意外なところにあるもの
です。私についても例外ではありません。

奈良に転居して間もないころ、少しばかりの庭を手入
れしておりましたら、たまたまお散歩中の吉本先生に、
声をかけて頂いたのが、そもそのきっかけです。

詩吟については全くの素人。右も左もわからない私が、
流れのまま習い始めて十余年……。時には『九段の桜』
を吟じて亡き祖母を憶い、またある時は、吉本先生の吟



平成5年度 後期歴史探訪(北陸の旅) 平成5年11月7-8日 (於)安宅の関跡

じられる『人生五十功無きを……』を聞いては、漢詩の世界に浸っておりました。重なる想いで心は詩吟に魅了されつつも、子育てという大事な時期でもあり、熱中できなかった様に思います。当時は大声で、しかも人前で詩うことに照れや羞じらいがあり、年を若くさせたものでしたが、今や、現代人にありがちな、ストレス発散の手段として大きく貢献し、以前とはまた違った意味で、二十や三十歳は若くなつてしまいました。今では同じ趣味を持った仲間が増え、楽しみも増え、そしてついでに若返る……とはなんとお得な人生でしょう。

そうそうお得と言えば、楽しみのひとつとして、季節の良い頃に旅行の話がもちあがります。最近では秋に詩吟の会四十名近くと共に、北陸史跡めぐりへと行って参りました。見どころは既にご存知のとでしょう。

ここに、詩吟の会ならではの楽しみがあります。北陸は石川県安宅の関を詠んだ詩、

「過安宅関偶占」

田中 哲莒作

義経の立場がますます怪しくなり、それでも……と、奥州の藤原秀衡をたよりに北陸路に赴く義経、弁慶の一行、安宅の関は一行にとっては難関であります。『義経

ならば通さぬ』と、富樫の厳しい追及に、主君を想う弁慶の一時の機転できりぬけた。後に様々な形で伝えられる大舞台となった場所です。

あたかのせきあとをすぐぐうせん

たなかてつしよう

過安宅関跡偶占

田中哲莒

主従彷徨行欲窮

主従彷徨行窮らんと欲し

誠忠振策是深衷

誠忠策を振るう是深衷

松風似聴通関願

松風きくに似たり通関の願

黙々銅人荆棘中

黙々銅人荆棘の中

☆彷徨―さまようこと、うろつくこと。

☆荆棘―いばら、危ない。

その情景を想って詠んだ詩は、まさにその関で合吟する迫力は心をうつものがありました。

今では想像もつかず、何も知らなければ通り過ぎてしまふ様な風景も、詩を知る事で足を止めて、あらためて見る事ができます。詩吟を習ってこそ味わえる喜びです。そんな心のゆとりも生まれ、今ではすっかり詩吟の虜になってしまいまし

た。

ここにご紹介しているのは、「詩吟の会」の楽しみのほんの一部です。その他にも、新年会や、お月見、そして一年間の励みにもなる競吟大会と、行事はめじろおしです。

少しでも興味を持って頂けたのなら……どうぞ一緒にしませんか。初心者大歓迎。皆様のお越しを心よりお待ちしております。

歴史教養講座

廣田 好實

森浩一・同志社大学教授が企画監修し、複数新聞記者の手記で構成した『日本の遺跡発掘物語』（全10巻・社会思想社）。その巻6〈石舞台古墳〉紹介の項で、次のような記述と出合いました。

奈良盆地南東部の飛鳥の里。明日香村から橿原、桜井両市にまたがるこの地に、十指にあまる宮都が営まれたのは古代国家形成期の七世紀のこと。その飛鳥のシンボ

ルが石舞台。〈同古墳は県史蹟調査会と京都大学考古学教室の手で昭和八年暮れ、同十年夏の二回学術調査が行われ、当時の様子があとに続くが略〉

第一次調査のとき、連日見学者でごった返す作業現場に、ちっちゃな少年がよく現れた。土運びの空のトロッコに乗せてもらっては喜び、巨石をクサリで巻いて持ち上げる作業が始まると、目を輝かせてあかず眺めた。

二次調査のときは小学生になっていて、現場に姿を見せぬ日がないくらいだった。石舞台にほど近い唯称寺の長男で、名を網干善教（あほし・よしのり）と言った。

その少年が畷傍中学で考古学部に入って橿原考古学研究所に出入りし、のちのち橿考研の「石舞台古墳発掘50周年記念事業委員会」の委員長に就任（昭和五十八年）するのだから、世の中はわからない――。

むろん、みなさんはおわかりですよ。その網干さんこそ、いまニュータウン文化協会のけん引車であり、歴史教養講座の講師ご当人であること。

数多い先生の肩書には今春さらに「関西大学博物館長」が加わり、インドだけでなくシルクロード・タクラマカ

ン砂漠での遺跡発掘にも携っておられます。

講座の開講は毎月の第二火曜日が原則（年に一度か二度、先生の海外出張などによる休講も）。午前中二時間の授業なのに教室はいつも満員。理由？ 講師の、人をそらさぬ話術の巧みさと話題の豊かさに尽きます。

講義の始まりは毎回、折に触れ時に応じての『時事解説』。新聞の論説・論壇のような堅苦しさはみじんもなく、これがとてつもなく砕けていて有益。たとえば——
「しっかりハモたべはりました？ とところで同じ菅原道真を祭神としながら太宰府は天満宮、大阪は天神さん。この呼び名の違いにも深い歴史のナゾが秘められている。今日はそのナゾ解きから始めます。」

夏の高校野球大会がたけなわとなれば「球場名・甲子園の由来」を登板させ、年賀状シーズンには「時折、一月元旦と刷られたのを見かけるが、あれは間違い。元旦の二文字は一月一日以外には用いない」で口火を切ってカレンダーの大安、先勝、友引、仏滅……へ。

残り時間が講座の正科ともいうべき『日本書紀』の勉強会。いま用明〜崇峻朝と進んで秋にはいよいよ推古時

代。教授のふるさと飛鳥を舞台に、石舞台古墳の葬者？とされる蘇我馬子が随所に登場します。それこそ先生の独壇場。聴き漏らす手はありません。

そこで初受講者へのご忠告——会場（市北部出張所会議室）へは一分でも早くお出かけを。聴きやすい席は瞬く間に埋まります。テキスト（プリントコピー）はその都度配ってくれるのでご心配なく。もちろん文化協会員は無料です。

フランス語講座

小林 雅子

フランス語のレッスンに楽しく通っています。と申しますと聞こえは良いですが、欠席する事多く、クラス足を引っぱるだけに留まらず、かじらせていただいているのが実状です。

元々、英語コンプレックスで、フランス語だったら一からのスタート、解からなくても平気かなと軽く考えたのが認識不足で、やはり、英語が出来る方は、他の語学の理解も良ろしく、出来ない者は、替わったからといっ



て、結果は同じでした。その上、具体的な、修得目的のないまま、教えて頂いたことも、すぐ忘れてしまい、毎回、その繰り返しで、月日を数えると恥かしい限りです。

こんな私が、その中に連なっておられるのも、ご熱心に、ご指導下さるお二人の先生と、良きお仲間にも恵まれているからです。

理解度の違う生徒達を、忍耐強く、優しく、厳しく、実に、的確で、爽やかに教えて下さっています。

高橋先生の時間は、主に日常会話が身につくために、テキストやテープ、宿題を取り入れながら、生きたフランス語が学べるように工夫されています。

根来先生の時間は、テキストが新しくなり、日本の、生活・文化などが、フランス語で書かれた本を読んでいます。お二人の先生の魅力でしょうか、フランス語を、勉強させて頂いているのに、幅広い知識も得られる、貴重な時間です。

お仲間の中には、ヴェルサイユ留学を実現された方、又、日頃の成果を、外国旅行で実践されている方々の、楽しいお話を伺う機会も増えて、それも早速、会話の勉強

に取り入れられ、旅行気分大満喫です。

おしゃれで、フランス語を、こよなく愛される先生方。世代は違いますが、それぞれに素敵なクラスメートの方々に支えられ、いつの日か「プロヴァンスの十二月」のようなところを旅する日を夢見つつ、歩んでいけたらと思っています。

本当に、こんな贅沢な、「農婆」おばさんのコマージュルより、身につく、高の原駅前留学、皆さまもなさってみませんか。

木目込・押絵同好会

S・Y

幼い頃、女の子はだれでも、お人形を抱いて遊んだことがあるでしょう。私にも、お気に入りのお人形があって、小学校に入っても、ままごと遊びのたびに、私の相手になってくれました。着物もかなり古び、お顔にもシミが入ったりしていたけれど、どうしても手放せず、正面ではないけれど、部屋の隅にそっと置いていたのを憶えています。

そんな人形への思い入れが、文化祭で展示された作品を拝見したときによみがえってきたのです。

私も作ってみたい！

私に作れるかしら？

そんな気持ちで入会したのです。教室へ緊張して一歩踏み込んだのですが、私の心配は吹っ飛んでしまいました。谷口先生を囲んで実に和やかな雰囲気、そのうち私も、すっかりうちとけて、何でもお聞きし、手にとって教えていただきました。

そして、やっと最初の作品が仕上がったのです。確かに未熟ではありますが、製作過程の苦勞を思えばほんとうにいいおしいものです。いつまでも自分の身近に置いておきたいと思います。

「お人形のように」とよく言いますが、作ってみると、人形は形があるだけでなく、作る人の心が込められていて、「生きている」と思います。同じ材料を使っても、二つと同じものに仕上がらず、作る人の個性が、その時の心情が、人形に移るようです。いわば分身のようで、そう考えたとき、私は、「人形を作る」ということを軽く考えることはできないと思いました。

私は、いつまでも残る人形を、あの方にも、この人にも、大切に身近に置いていただけたらと、大それたことを考えて、また、次の製作にとりかかりたいと思うのです。

それから、この会の和やかなのはなぜか？ 私も一年たって判りました。先生が気さくなこと、先輩が親切なこと、そして雰囲気づくりの為に色々と企画して下さる方のあることです。もちろん、親睦を目的として、活動日を振替えて見学会、新年会等もあります。そして毎回の昼食時は人形を忘れて話に花を咲かせるのです。そういう中でお互いの人柄を理解し合うように努力していることです。

先輩の方たちは、すばらしい作品を作っておられます。八重垣姫の押絵の羽子板（多分、孫さんへのプレゼントかな）、祝い人形（あれ、初孫さんかな？）、そして立雛など、見せていただくだけで励みになります。

自由教材、自由進度（ココまでやってきなさいということはない）です。どうぞ人形に愛着をお持ちの方、関心をお持ちの方は、活動日にお立ち寄り下さい。

活動日 第一・第三水曜日

時間 午前十時～午後二時
場所 北部出張所会議室

中国語講座

岩田喜美子

最初に中国語講座の活動状況をお知らせします。現在初級クラスが五名、中級クラスが三名の計八名が、久富木先生の御指導のもと中国語を学んでいます。曜日は初級中級とも、毎週水曜日、時間は初級クラスが九時三十分～十時三十分、中級クラスは十時三十分～十二時までとなっています。場所は、北部出張所の会議室をお借りしています。講座の内容は、中級クラスは、中国の民話「リンズとシャーズ」を読んだり、中国語会話（中級用）を学んだりしています。初級クラスは、昨年の十二月に始まりました。初級クラスの五名の内、私を含む三名は全くの初心者ですので、中国語の発音、声調を繰り返し繰り返し練習しています。それと並行して、「中国語で話そう（入門篇）」で、ごく簡単な中国語会話を学んでいます。又時には、中国を旅行された方の貴重なお話し

を聞かせて頂き、楽しいひとときを過ごしたこともあり
ました。

さて、私事になりますが私は一九九二年三月に初めて
中国の広州、桂林を旅行しました。それまで本当のところ、
中国に対する関心はほとんどありませんでした。し
かし、この旅行が私にとってはまさにカルチャーショッ
クとなり、中国語を学ぶ切っ掛けとなりました。広州の
街中にあふれる人、人、人、車、その間を縫うように走
り回る自転車、エネルギーな都市広州は、すべて私
の想像を越えるものでした。又、桂林のあの独特の形を
した山々は、まさに水墨画の世界にいるようで、心を奪
われて見入りました。しかし、最もショックだったのは、
朝、ホテルのテレビから流れてきた中国語でした。もち
ろん一言もわかりませんが、「わあ、なんて美しい
言葉」と思わず聞きほれてしまいました。中国語の美
しいメロディー（これが声調と言われているもの）が私
の心に深く残りました。その後、文化協会講座の中に中
国語講座があるのを知り教えて頂くことになりました。
不安もありましたが久富木先生が、「大丈夫、できます
よ。」と励ましてくださり、又、中級クラスの方々にも

暖かく迎えて頂き、何とか現在に至っています。それに
増して、共に学ぶ仲間がいるという事は励みであり、楽
しくもありで、毎回とても和やかな雰囲気の中で学べる
ことを大変嬉しく思っています。又、先生がとても熱心
に根気良く教えてくださいますので、私たち初級クラス
の五名は、くれぐれもお疲れがでませんようにと祈って
いる次第です。

某ラジオ局のアナウンサーが、「中国へ行くと元気が
出る」と言っていました。まさにその通り。私も落ち込
みそうな時は、中国のエネルギーな街や人々を思い
出します。何時になるかわかりませんが、私の拙い中国
語を手土産に次回北京を目指したいと思っています。
外国旅行をなさりたい方、あるいは落ち込んで元気のな
い方、一度中国を訪ねてみませんか。

絵画の会

島川 正行

◇今年も通例の如く、毎週火曜日午前十時から二時間
(第二週は午後一時半から)、年間にすれば約四十回、教



室で花とか静物、果物などを画題にし、ときどきは教室を出て、この辺や奈良公園へ写生に出かけていきました。◇まず第一に絵を描くことを楽しみたい、出来れば上手になってみたい、と気軽で欲張らない人達が集まっています。経験年数十年をこえる人から、一年に満たぬ人まで、また年齢も四十代から七十代までといろいろです。みな和気藹々と、ああでもない、こうでもない、と楽しく描いています。そして、描き上げた絵を一齐に並べて先生の批評を聞いたり、他の人の作品を見てその感想を聞いたり、ときには製作中の先生の描き方を見たりしているうちに、知らず知らず腕の方も上達するのが、この会の特徴です。

◇ただいま会員は二十一名、教室はアカデミーの中にある、水彩画を描きます。上手とか下手とか、経験のあるなしとかあれこれ考えず、単純に絵を描いてみたいという気持ちさえあれば、気さくにおいで下さい。水彩画のもっている透明感と色彩の鮮やかさ華やかさにきつとご満足いただけると思います。先生は、教え方に独自の境地を開いておられます経験豊富な梶野哲先生です。なお、会員の作品は、秋の文化祭に展示されますのでご覧になっ

て下さい。

◇十年をこえてご指導いただきました眞先生が、この四月大津に転居されました。教室では、いつも楽しい気分が描けるよう軽妙洒脱な会話で、われわれを笑わせ気分をほぐしていただきました。未熟者には、絵はそれなりに苦しいものですが、それを感じさせない先生のキャラクターに絶大な敬意と謝意を表する次第であります。どうか第三の人生を心おきなくお楽しみいただきますよう心から願うものであります。

野草をしらべる会

前川 良雄

本会は昨年度前川が都合が悪くて活動らしい仕事ができませんでした事をおわび致します。本年はなんとか時間を作って仕事を予定しております。

野草は冬の間枯れていたのが、三月、四月になると一斉に芽生えて、きれいな花を咲かせ、ふまれても、引きぬかれてもいつのまにか、つぎつぎと芽生えてあき地道ばたに生い繁っています。

つぎにこのニュータウンでよく見かける草の名を書きましたので、その中どれほどご存じですか、一度目を通してよんでください。

母子草、父子草、オナモミ、メナモミ、セイタカアワダチ草、ヨメナ、ヒメジオン、アレチノギク、アザミ、タンポポ、西洋タンポポ、ニガナ、春ノノゲシ、オニタビラコ、キキョウ、カラスウリ、アマチャヅル、オミナエシ、ヘクソカヅラ、ヤエムグラ、ナンバンギセル、イヌフグリ、ホオツキ、ホトケノザ、ハッカ、ヒルガオ、センブリ、リンドウ、チトメグサ、セリ、ミツバ、マツヨイグサ、タデ、ミゾハギ、スマイレ、カタバミ、ヤハズソウ、メドハギ、クサネム、ヌスビトハギ、カラスノエンドウ、カスマグサ、スズメノエンドウ、クズ、アカツメクサ、シロツメクサ、ヘビイチゴ、レンゲ、ワサビ、イヌガラシ、ナズナ、キツネノボタン、フクジュソウ、ハス、ナデシコ、ミミナグサ、ハコベ、ウシハコベ、ミノフスマ、スベリヒユ、アカザ、ギシギシ、スイバ、ミゾソバ、イタドリ、クワクサ、ドクダミ、ネジバナ、アヤメ、シャガ、スイセン、ホトトギス、ノビル、スズラン、スズメノヤリ、スズメノテッポウ、スズメノカタ

ピラ、ツユクサ、カラスムギ、クサヨシ、オヒシバ、チカラシバ、エノコログサ、イヌビエ、チガヤ、ススキ、ジュズダマ等々ずいぶん野草の種類があります。みなさんこの中どれほどご存知でしょうか。

短歌を楽しむ会

宇野木久代

私達の『短歌を楽しむ会』も回を重ねて四十回となりましたが、残念な事にリーダーである寛先生が、滋賀県の方へお引越しのため、続けて頂けなくなりました。

寛先生には、短歌の他、絵画、そして文化協会副会長としていろいろお世話様になり、お礼申し上げます。

皆様は『短歌の会』と聞けば肩のはる所と思わないで下さい。『短歌を楽しむ会』ですから、名の如く短い時間、古典の美しいしらべを思い出しながら、気楽に遊び、楽しく皆様からお教え頂く所ですが、私などいくら教えて頂いても脳に行かず、頭の中を横ぎるだけ。年齢もすっかりと頂き乍ら知らない事ばかり、字引と首っ引きでどうにか三十一文字並べるだけ。並べ終えたら『やれやれ



ばけぬ為には……”と思ひ、楽しい事はもちろん、悲しみ苦しみを三十一文字の中に託して詠む楽しさに引きづけられ、家族から「遊びすぎ」と言われながらも頑張っています。

私事の多い拙い文、お読み頂けましたらお友達もお誘い下さいまして、**『楽しむ会』**にお出かけ下さい。

お茶など飲みながら、二時間位……。月一度、第三火曜日午後一時三十分からです。(笑い過ぎて、おなかの皮が振れたりお顔に皺がふえても保障の限りではありません)せん)

万葉集講座

西村美佐子

奈良のことには、全くの無知であった私が、いつの頃からか奈良にひかれて、あちこちと探索に出かける様になり、それと共に、万葉集の世界にも少しずつ足を踏入れることとなりました。

四五一六首の歌の中には、政権の座を争った人々の、悲しみに涙した心の叫び、生活の悩みや喜び、自然の風

物との関わり、等々、古代の人々の念いが一ぱいに詰まり溢れ、むつかしい学問としての解釈や説明には、遙か縁遠い私も、この数々の歌が、上は天皇から乞食に至る迄、万葉人の生活と共に深く根づいて、その人々の息吹が体の中に「じわっ、じわっ」と、沁み込んでくるのです。時々万葉の世界に想像を逞しくするのも、いいなあと、時代逆行をしています。

文化協会に、平成元年より万葉講座が設けられ、早や六年目、松岡先生のお話は、いつも細部に亙り、懇切丁寧、その上沢山の資料に、独特の御意見、お考えを載せてくださるのも楽しみの一つです。教わっては忘れ、忘れては又教わる、の私ですが……。

高の原を一足のばせば西大寺辺り、平城宮址、そして奈良公園、東大寺辺りと、ほんの間近に万葉の人々が偲ばれます。

春うらら陽気に誘われて、散策を楽しみました飛火野のみどりの中、春日野や大仏殿近くの桜、行き交う人々の笑い声、上を見ても、下を見ても、左も、右も、みんな春、春、春。池の水面もきらきらです。

見わたせば 春日野の野辺に 霞立ち

咲きにほへるは 桜花かも (二〇一—一八七二)

春日野の 浅茅が上に 思ふどち

遊ぶ今日の日 忘れえめやも (二〇一—一八八〇)

春霞 立つ春日野を 往き還り

われは相見む いや年毎としのほに (二〇一—一八八一)

白くて可愛い花の集まり、馬酔木がもう満開に近い様子でした。

池水に 影さへ見えて 咲きにほふ

あしびの花を 袖こきに扱入れきな (二〇一—四五二二)

磯の上に 生ふる馬酔木を 手折らめど

見すべき君が ありと云はなくに (二一—二六六)

大伯皇女が弟大津皇子に、想いを馳せた悲しい心が、

この愛らしい花とは裏腹に、頭の中をかすめます。タイムトンネルをくぐって、勝手気儘に時代の背景や、万葉人の語らいを、心に浮かべてみる一時もなかなかのものです。

そんなこんなで、奈良に住まいして、この万葉講座とも出会え得たことを、有り難く思っている……此頃です。末永くこの講座の続きますことを願って。

思いのままに——。

パッチワーク

岡田 越子

もうこれ以上受講したらパンクすると思いがら、又、パッチワークのグループに入れて頂いて、七カ月位になります。そして又、パッチワークの魅力にとりつかれています。

もともと編物、洋裁、ミシン刺しゅうの教室をしていましたので、針を持つのは好きなのですが、パッチワークがこんなに面白いとは意外でした。

洋裁、和裁の残り布がワンサとあり、年も取って来ま

したので、少し整理したいし、捨てるのは、おしいしと思ったのが、動機でもあるのですが……。

先ず先生が素敵な方なのです。やさしくて、頭の回転が早く、センスがいい方で、気が変になりそうな模様を次々と考えて、すばらしい模様になって行きます。

又、先輩の方もしつくりと落ち着いた方ばかりで、辛抱強く小さい布を次々と何枚も何枚も、つなぎ合わせて、小さな袋物から大きなベッドカバーや敷物まで、黙々としていらいっしやるのです。たまには笑ったり息抜きもしながら……。

パッチワークの醍醐味は、自分の作品が如何に変わって行くかという処だと思えます。勿論先生のアドバイスがあればこそですが、こんな平凡な布の集まりが、と思う様なのが、すばらしい作品になるのです。

私は、残り布ばかりで、最初から大物にとり組みましたが、先生のアドバイスで、素敵なベッドカバーになりつつあります。そして次の作品に入りたくて、又娘にせかされて、クッションに、パッチワークを、アップリケ風に、とりつけています。もう楽しくて仕方ありません。早く講習の日が来ればと待ち遠しい位です。

その私を見て、超不器用な娘が、本を買って来て、これして、あれしてと注文をつけ、「私もしてみようから」と言っています。

私の残り布が片づくまでといったら、相当長い年数たのしめると思っています。それまで、丈夫で、長生きしたいものです。

針を持つのが好きな方、気の長い方、どうか一度のぞいてみられませんか。

お待ちしております。

……歩く会

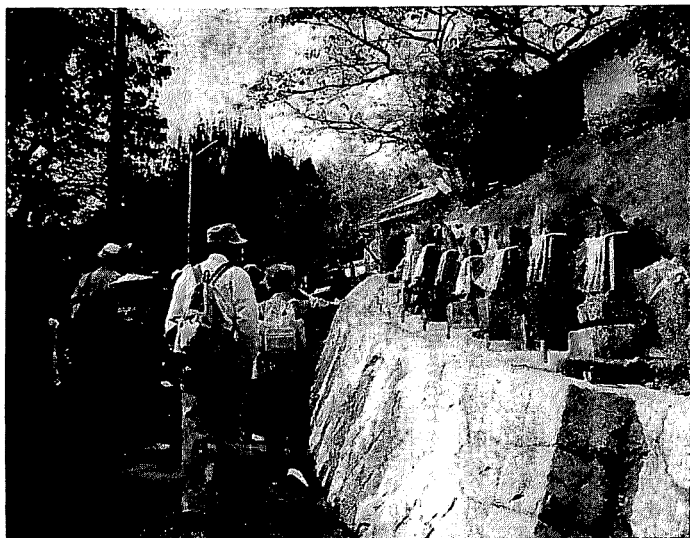
松岡 禮一

田原ノ里

★十輪寺 ↓ 光仁天皇田原東陵 ↓ 太安萬侶ノ墓

↓ 春日宮田原西陵 ↓ (鉢伏峠)

・このところ、雨が多い。



— 十輪寺の入口 —

一週間程前、台風十四号が各地に災害を残して通り過ぎて行った。台風が去ってからも雨続きである。八月の日記を開いてみると、「冷」、「冷」と言う字が

目につく。

垂れ下がった雲をふっ飛ばすように、爽やかなメロディーを残し、バスは水間の山の方へ走り去った。

この日も、雨模様。帰途になるまでもちこたえてほしい、と、祈る。

。バスを降りると「十輪寺」。

沢山の仏様が一行を迎えてくれた。この仏様達は、この新道をつける時、土中から発見された「仏様」だと言う。前掛けに、村の人々の名が書かれている。

それぞれの仏様の表情が何とも言えない。

ものの本には、「何も見るものがない」と、書いてあるが、お寺の本堂の屋根の《流れ》は素晴らしい。

美しさだけでなく、そこには音楽的な《響き》が流れているようだった。

「アア、ウツクシイ。」

横にいた人も、同じように感動する。

本堂の右前の十三重の塔もよい。本堂横手に宝篋印塔や石碑が所狭しとばかり、一所に集められている。

昔、この地には、多くの寺院が競っていたとの事であ

るが、明治初年の廃仏の犠牲になった寺々の、後始末の姿であるのかも知れない。

——それにしても、余りにも哀れである。

。街道を左へ折れた農家に、真白な花が美しい。ガヤガヤ騒いでいたら、隣から、「ダチュラ」と言う花である事を教えてくれた。

。今井堂の「絵馬」にはびっくりする。第一、その数の多い事。第二に、種類の多い事。その中には文政元年（一八一八）と言う古いものもあれば、猿が馬を引くと言う古い形式のものもある。

「奉納」とは言わないらしい。「奉懸」とある。

。集会所の屋根にビニールがかぶせられていた。先日の台風で大木の枝が飛んできて、デッキ穴をあけたらしい。エライコッチャ（二回目訪れた時には、もう美しく修復されていた。——ホッとする。）

。一寸歩いて村の中。ここも台風の被害がひどい。



—— 太安萬侶ノ墓ノ下ニテ ——

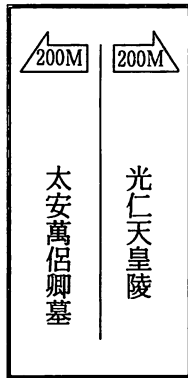
その酷さに驚く。田圃の稲が薙倒されている。それがキレイに揃えたように倒れている。——不謹慎な言葉で恐縮ですが、——円を描いた倒れている様子は、とても美しい。

それにしても、倒れた穂を起すだけでも、大変な仕事だ、と思う。

。光仁天皇の「田原東陵」は近かった。美しく整備され、掃き清められていた。

やっぱり、グルッと一回りする。

。こんな案内板があった。(途中の道)



丁度、中間点の表示である。
親切な村人だな——と思う。

。「太安萬侶ノ墓」への上り口にトイレ。
マイッタ。夥しい人々が、この地へやってきた証拠であらう。

墓の上からの眺めはとても上々。前も後ろも、右も左も、茶畑。茶畑。茶畑である。濃い緑の列が坂の下へ、坂の下へと続く。誠に見事。

左京四條四坊從四位下勳五等太朝臣安麻呂以癸亥
年七月六日卒之 養老七年十二月十五日乙巳

思えば、この一枚が、——このたった二・九センチの一枚が大騒ぎになったのである。

。「春日宮天皇 田原西陵」への道はよい。

ススキは白い穂を風に靡かせて、幼なかりし頃の田園風景を我々に提供してくれていた。ホワホワとして穏やかな暖かい風景である。

ト、ト、ト、ト。又、ト、ト、ト、ト、ト、

と、坂道を下ったら御陵である。

ここにお休みになっていらっしやるお方は、馴染みの深いお方である。

『万葉集』でもそうである。

御陵から、街道へでる道、則ち、参道の素晴らしいコト。コレ又、見事。

。そして、我々は、今――。

今、志貴皇子の、葬送の道を逆に歩いているのだ。

長い、長い単調な下り坂である。余りにも単調である。

余りの単調さの為なのか？ 隣を歩いていた老人は、急に歌を歌い出した。

（徐州 徐州と人馬は進む

徐州居よいか 住みよいか

洒落た文句に振り返りゃ……

連られて、私も口ずさむ。

我々が歌う「歌」は、どうも軍歌が多い。五十年前を思い出す。ノモンハンで散った松本や玉出の魂がオレ

の心に生きているのだ!!

オレは、今、「生きている」と言う事実には、感謝するのみ。

恐らく、今、歌っている《彼》も、戦友を偲んでいるのであろう。そして、今。

「今日」と言う日。この、満ち足りた平成の今日を感謝しているに違いない。

こんな事を考えながら、爪先が痛くなるような急な坂を、下る、下る、一気に下る。

。やがて、道は開けて、バス停が見えた。

空はまだ明るかった。

北の入口（……と、般若坂と……）

★元正天皇奈保山西陵 ↓ 元明天皇奈保山東陵 ↓

奈良豆比古神社 ↓ 西福寺 ↓ 夕日地藏菩薩

。や、や、や、や、や、……。

今日は、新しい顔が多い。何かがあるんだ。と、思う。

(——この疑問はすぐ理解出来た。)

。元明天皇「奈保山東陵」

きれいな御陵である。例の如く、グルリと一回り。

そして――、

元正さんの御陵から、元明さんの御陵へ行く道の事である。

不意に隣のご婦人から、パッと声がふりかかる。

「クルマでショッチュウ、ここを通っていますが、

ここの御陵へ立ち寄るのは、初めてや。

ヨカッタ。ヨカッタ。」

(平城ニュータウンから近い、こんな道を歩く。

こんな計画でもよろしいか?)

と、答えようとしたら、こちらの話が終わらない中に、返事が、パツパツと返ってきた。

「ヨカッタ、ヨカッタ、……。ホント、ホント、……。

ネウチ、アル、アル、……。ヨカッタ、ヨカッ

タ……。」



。こんな事を決めたわけではないが、御陵へ行けば、必ず御陵の周囲をぐるぐる回るようになってくる。元正さんも回った。そして元明さんでも……。
「垣が開いている。開いている。」

—「お手をドーズ」の所—

と、ゾロゾロと前の人の足元を注意しながら、狭い狭い径を行く。ワイワイ、ガヤガヤいつもの調子。しかし、ここで、一寸変わった面白い事をしてもらう事になる。

「奥様、お手をドーズ。」

とて、土手を上る。

これについて、一寸説明が必要と思う。

御陵の周囲を回るのも悪くはないが、周囲が広い上に、御陵の外側はトラックの往来が激しいナドナドの理由により、近道と言う事になったワケ。土手を上がると、竹林、そして畑。レタスや大根など、いろいろな野菜が植えられている。黙々と働いておられる姿をチラッと見では、ベチャベチャしゃべりながら往く。

。奈良豆比古神社

「丁石」がある。大きな神社ではないが、色々な珍しい物や貴重な文化資料の多い神社ではある。神社のすぐ横が伊賀・伊勢方面への分岐点。

「道標」によれば、伊勢まで凡そ二十七里とある。



— 樟の大木 —

。宮司さんの御好意で、ここで休憩、昼飯をいただく。昼食後、神社社殿裏側の樟の大木を見る。

「コリヤ、デッカイ。」

「コリヤ、スゴイ。」

アッチコッチで《驚き》の音がする。

。お隣の「西福寺」へ行く。

約束してあったのに、住職さんが不在でござる。どうやら、約束をお忘れになった様子でござる。

はてさて困った事でござるによって、辺りをキョロキョロ。みんなも、キョロキョロしてござる。

その時でござる。誰かが、

「あれ！ インコ！」
と、指さす。

みんな見上げる。

成る程、成る程、デッ
カイ鳥が枯木にとまっ
てござる。

インコさんでござる。

大きな鳥でござる。

美しい羽根の鳥でござる。

羽根をバタバタさせて
ござる。



“あれインコ”

「威嚇ダ。」と言う人。

「機嫌がいいんだ。」と言う人。

さまざまでござる。

みんな一緒に、お堂の前で、ワイ、ワイ、騒いでいる程に、突然、

「キキキ、キキキ、キキキ、……。」

と、インコが叫ぶ。

奇妙な声！

住職さんのご帰宅でござる。

バイクでの、ご帰宅でございます。

住職さん曰く、

「スマン、スマン。」

「ワスレテタ、ワスレテタ。」

この住職さんの挨拶に、みんなアツケに取られたまま本堂へ。出てくると、住職さんは、約束をお忘れになつた罪滅ぼしかは存じませぬが、インコの曲芸を見せて下さることになったのでござる。珍しい、見応えのある《芸》でござる。

インコの名前は、「コータロー」

住職さんの話によれば、

“走れノ 走れノ コータロー。”

が流行した頃だ、と言う話でござる。

。 「般若寺」は、素通り。

楼門の外から、きよろきよろする。

《記念写真》

私が最初この寺を参詣した時は、殆ど訪れる人はいなかつたように思う。

それなのに、今は、拝観料を取る……。

これも、時代か？

。歩きながら、空想に耽る。

今、歩いているこの道は、——この道は、興福寺一乗院の兵が、大塔宮二品護良親王を、走り回って、捜し回つた道である。そして一方、護良親王は逃れた挙げ句、この般若寺に逃げ込んだ道なのだ。

。アノ、明治初年の《廃仏》の際、多くの寺が破壊されたが、幸いにもこの「般若寺」が生き残る事が出来たのは、護良親王に《ゆかり》の寺と言う事であろうか。

。「柵店」と言うのがある。今時珍しい。

。馬をつなぐ「環」も珍しい。

。この「環」も、先刻見てきた「柵店」も、案内書には

かなり残っているように書かれているが、実際には一軒しか見る事は出来なかった。

残念なり。

。相も変わらず、ブラブラ歩いて、列は延びて、先頭と殿とは大分離れている。この「……歩く会」は、これで良いのだ。

この、思い、思い勝手な行動の中に、それぞれの人生があるのだ、そして世界があるのだ。

——僕は、そう思う。

。「北山十八間戸」に行く。食堂の人の好意により、入り口を開けていただく。

鎌倉時代の名僧の忍性の、この救難事業の施設も、彼の偉大さを示す一つであろう。

。これで、今日は終わり。

そこには——

「夕日地蔵」さんが、静かに西方浄土を目話めていらっしやった。

《追記》

。今年は、小生の体の都合で、皆様には随分御迷惑をお懸けしました。その為に、今年は二カ所しか行く事が出来ませんでした。

おわび致します。

。平成六年度から、「……歩く会」の窓口を広田さんに御願ひ致しました。

皆様には、長い間、お世話になりました。有難く存じます。

この紙面をお借りして御礼申します。

資料を提供して下さいました人、下見に連れて行って下さった人、有難うございました。そして又、いつもいつも喜んで参加して下さいました方々、有難うございました。

どの方にも、どの方にも、心から御礼申します。

。これからも、よろしく。

(窓口 松岡 禮一)

英語講座

麻生 道子

英語講座は、平城東公民館で毎土曜日に開かれています。朝九時二十分から十時二十分までと、十時二十分から十一時四十分大きく分かれていて、教材も別になっています。ずっと通して参加されている方も、前半あるいは後半のみ参加の方もあります。

鎌田先生のレッスンは、徹底したヒアリング中心のもので、聞いて、リピートする。覚える。聞いて、書き取る。正確に聞き、正確にリピートします。文法がしっかり入っていないと、正確に聞くことはできません。私は後半にだけ参加しているので、一時間と少しですが、聞き、繰り返し、書き取ることには集中すると、かなりハードで、もうそろそろ、英語に疲れた、と思うくらいこの頃、レッスンがおわります。前半から参加されている方たちはもっと長いわけです。いろいろな教材を使って手を替え品を替え、聞かせ、同じスピードでリピートさせ、覚えさせるテクニックは、長年の授業で培われた先生ならではのものと思われれます。



目からの英語には、けっこう接していても、耳からの英語、まして自分から口にするなど中学以来ではなかるうかというくらい、「英会話」からほど遠いところにいる私ですが、正味二年ほど鎌田先生の講座に参加させていただいて、色々なことを教えていただきました。

①聞けなければ、話せない。②文法を知らなければ(母国語でないかぎり)聞き取れない。③何度もリピートし、覚えることによって、会話のレパトリーをふやすことができます。

これからも、細々とであっても学習をつづけていきたいと思います。

囲碁同好会

谷村 操

「橘中の楽しみ」

昔、中国に橘の園を持っていた人がいたが、ある冬ひどい霜がおりて、橘がみな枯れてしまった。枯れた橘の中に、三斗入りの瓶くらいの大きな実がいくつかなって

いた。その実を割って見ると、どの実にも二人の老人が向かいあって碁を打っていた。老人たちは長い白髭を垂らし、血色もよく、盤を挟んでいかにも楽しそうであった。これが表題の語源である。年をとるにつれて、囲碁を楽しむ幸せを心から感じるこの頃です。私も老後は橘中の老人になりたいものだ。昔は碁は上流知識階級にかざられていたそうですが、ランプやサイコロのように、誰でも簡単にできるゲームとちがって、奥が深く、十の八百乗の手があるそうです。一兆でも十の十二乗ですからその深みが推察されます。囲碁とは弱いうちは、「遊戯」であり、強くなればなるほど「最高の芸ごと」の一つではないかと思う。何ごとともひと通り呑みこむまでにはそれ相当の努力が要ると思うが囲碁は研究、努力のしがいがあり、勝敗に運の要素がほとんどない。あるとしたらポカ(これも実力のうち)しかし努力、研究イコール上達でもない。ただ定石どうりに打てばいいわけではない。「定石知って一目弱くなり」という川柳もある。又、「信念ある自己流は信念なき正統に勝る」とアーノルドパーマーは言っている。私自身全体の作戦やプランスを考えず、勝敗にこだわり、こせこせと地を取りに

行き何年も上達せず低段者に低迷している。しみじみと碁のむずかしさを感じます。私自身上達しなかった最大の理由は腕を磨くことに専念すること無く、ただ勝負にこだわっていたからだと思う。「待った」をしたり、「打ちなおし」をしたり、「相手のポカを引きだし」て勝って強くなったと感違いし、その上読む力もないくせに長考して相手にどんなにか不愉快な思いをさせたかと思うと自責の念に絶えない。「人のふり見て我がふり直せ」このことわざほど実感させるものはない。囲碁は本当に人生の教訓になる。どんなに優勢な碁でも一つのミスによって敗けたり、敗勢の碁でも我慢に我慢しているといつかチャンスがころがりこんで勝つときがある。我慢にも限度があつて相手のミスを待つ粘りはただけない。素直に敗けを認め、見苦しくも粘っていた時間に、どの手が悪手だったのか相手に教を請うたら、どんなにか上達するのではないかと思う。本による勉強も不可欠ですが、なんととっても実戦が大切だと思います。プロならいざ知らず、我々アマはあくまでも楽しく打つことが一番です。さいわいにもこの地区には囲碁同好会があり、毎日曜日平城西公民館において、初級者から高段者まで

石を置いたり、置かせたりして楽しんでおります。又月に一度プロの先生が指導碁を打ってくださり、会員の皆様も多士済々、マナーも良く、日曜日の来るのが待ちどおしいこの頃です。無私の精神でお世話くださっている中村様、野田様、又月当番の方々には頭の下がる思いで、心から感謝しております。碁に覚えのある方、これから習いたい方、是非とも日曜日十二時半から六時までの間に、平城西公民館一階の居間をのぞいて下さい。

山歩きの会

西幹 友雄

廃村八丁

廃村八丁という言葉の響きには様々なイメージが浮かぶ。それには小鳥がさえずり、緑の谷間には四季折り折りの花が咲き匂った八丁だった。明治の始めの頃から、五戸五家族が八丁の村に住みついた。しかし生計は林業があるため生活の資は外部からあおがなければならなかった。木材を運ぶにはどの道をとるにしても深い山を越さ



ねばならなかった。

そんな平和な村に突如大雪が襲った。峠道の交通はとだえ人々は飢餓にひんするはめになった。このような大雪にまたいつみまわれるかも知れず人々は行先の不安と子供達の将来を考え、苦勞して作りあげた家や土地を捨てる決意をした。文明が届かない生活に耐えきれずひと家族ずつ去っていき、昭和十八年に最後のひと家族が去って、廃村八丁になってしまった。

『山歩きの会』(平成三年六月九日)もこの廃村八丁に行きましたが、今や八丁は廃村の面影もなく、京大高分子化学山の家のスマートな三角屋根が廃村八丁のイメージをかき消している。今も残っている有名な白壁の土蔵は殆どくずれ落ちて骨組みだけが残っている。

山歩きの会の今年の予定は左記の通りです。

- 六月 比叡山
- 七月 伊吹山
- 八月 直谷から魚谷山
- 九月 鎧から兜
- 十月 蓬来山

十一月 紅葉谷から天狗山

十二月 愛宕山

以上今年の山歩きの予定です。宜しく

古代史講座

中井美知子

高松塚古墳で壁画が発見されてから、考古学・古代史ブームとよばれる現象が巻き起こりました。いまもって各地の博物館で開催される展覧会や、発掘調査の現地説明会などには大勢の人達がおしかけています。

考古学や古代史の分野は、まだよくわからない事柄が多く、私達素人でもそれなりに想像をたくましくして、自由に勉強ができるということが、多くの人々を引きつける魅力なのでしょう。ニュータウン在住のこのような約三十人が古代史講座のメンバーです。

毎回の講座は、奈良時代の歴史書である『続日本紀』の通読です。ですが、この書物は正直なところ、とても単調で決して面白いとは思えません。当時の貴族・役人の人事記録などがやたらと長く、庶民の生活ぶりをうか

がえる物語などはほとんどないのです。にもかかわらず、毎回欠席者も少なく、会が長期間続いていることはとても不思議です。

講義は鬼頭清明先生の資料講読から始まり、解説が行われたのち質問が受け付けられますが、ここからが大変です。文字の一字一句について重箱の隅をつつくように質問する者、かたや、登場人物の人間性について論じようとする者など、まさに多種多様、ワイワイガヤガヤと話は展開し、盛り上がっていくのです。考古学や古代史が私達を引き付ける所以は、このあたりにあるようです。私がこの講座に入れていただいてから三年になります。私がこの間、大きな収穫がふたつありました。

ひとつは、鬼頭先生に巡り合えたことです。先生は、古代史研究の第一人者として御活躍で、日々御多忙のことと思われます。にもかかわらず、専門家でもない私達素人のために貴重な時間をさかれ、初歩的な疑問や質問にも真剣で実に丁寧な受け答えして下さいます。これらを通して私達の歴史や文化に関する認識が多少なりとも深まれば、歴史的環境の保全とか文化財の保護などといった社会的な問題も、より身近なものに感じられるかもし

れません。先生は、ニュータウンにお住まいということ
で、私達地域住民のために講座の講師をお引き受けくだ
さっているのですが、先生のお人柄もさることながら、
こうした社会活動はなかなかできないことだと敬服して
まいります。

いまひとつは、出席者の旺盛な学習意欲を目のあたり
にしたことです。メンバーの中には、戦前・戦中の歴史
教育を受けられた方もおられます。ですが、皆さんは新
しい歴史学や考古学の成果をよく勉強されており、テレ
ビ、新聞の発掘情報などにも注意されているようです。
古い歴史教育にとらわれず、新しい知識を吸収しようと
する熱い向学心には脱帽です。私も遅ればせながら”
といった気持ちになったことも大収穫でしょう。

講座は、毎月一回、時間は二時間程度です。年に数回
野外見学（史蹟・遺跡や博物館など）も行っています。
奈良という歴史環境に恵まれた地域に住みながら、それ
を無駄にすることはありません。子育てが一段落した方
も、お勤めを終えられた方も、少しでも古代史に興味の
ある方は、どうぞふるって御参加ください。

俳句入門

牧野 春駒

最近の数年間、この欄を振り返ってみますと、いつも
冒頭に、言い訳ということばが出て参ります。本年も何
回か書き直しまして、合同句集出版という、かなりの大
きな仕事はありましたが、やはり同じような内容になり
ますので、今回は突然お願いしまして、ご迷惑とは存じ
ながら、木村長子様に前半をお書き頂き、私の方は責任
上、昨年と変わった点を書かせて頂くことに致しました。
本来はこのことは、幹事の西山様にお願ひすべきでし
うが、ご承知のように文化協会全体のお仕事で、随分ご
多用中ですので、木村様にお願ひした次第です。この方
は、文化協会俳句会の前身の、なら山万青俳句会以来の
永いお付き合いで、かなり個性の出た作品、内容の豊富な
作品を生み出され、「層富」第八号には素晴らしい人生
を生きて来られたことを見事な表現で述べておられます
ことは、御存知の通りです。



俳句と私

木村 長子

俳句という深遠無辺なものに取り憑かれて、優に十五年の星霜。それはこのNTに移住してきた昭和五十一、二年頃に、現在のアカデミー広場にあった太い円柱に貼られていた「平城院句会」というピラがそもその私の俳句入門への開眼でありました。

思えば、あれから気の遠くなる程の歳月が流れましたが、俳句との絆は、一度も切れたことなく続いてはいますものの、好きと上達とは必ずしも交わることはなく、十年一日の如く、初学の域を脱出出来ないのが口惜しくもあり、又、恥しくもあります。下手の横好きと申しますか、さりとて辞めてしまえ、という気には、まだ一度もならないのも不思議なことです。

俳句の魅力。それは先生も仰られているように「苦勞する喜び」があるからです。その苦勞の賜をひっ下げて臨む月一回の句会での期待と落胆。誰にも見離された自分の句を、先生だけが拾って下さった時の一種名状しがたい喜びと戸惑い。句会は俳句をする者々の修煉場でもあるようです。一向に作句の腕は上がりませんが、選句

の力は些かついてきたように思います。しかし、観念的な傾向から句への好みも片寄り勝ちですが、それを乗り越えて秀れた句には、震撼させられるものを感じます。

わが師、俳人春駒はさすがホトトギス派だけに清冽、透徹、そこには先生の人格が底流しています。その句風に魅せられて、終生の師と仰いでいるつもりですが、どうも、私はその弟子としては異端児であるようです。四季の風物の中に、さり気なく自己の詩情を封じ込めた、流れるような句を作りたいものと念じ乍らも、ついつい驕りの多い感情過多の欠点は、どうも性格的というか、環境的というか、自分でも反省はしているつもりなのですが――。

とまれ、万太郎が、敦が、またある時は強烈な中村苑子が好きであつたりする私です。

何時までも蒸溜しない、我執の強い不肖の弟子をどうかお見限りなくご指導下さい。俳句とは切っても切れない腐れ縁!! おっと失礼。そんな気持ちできららと光る庭の新樹を眺めています。

前述しましたように、俳句入門講座(平城山句会)の

平成五年度のひと仕事は、五年前の「平城山」に続く合同句集「平城山二」を刊行ということでした。表紙の色が若草色から薄茶色に変わった他、次の点で、変化がありました。

	掲載者数	ページ数	掲載句数
平城山	一一一	二四二	九五〇
平城山二	三三二	三七三	一五〇〇

「平城山」掲載者の平均年齢は六十三歳でしたが、その内十四名が今回も載せておりますので、それぞれ五歳年齢を重ねて、数字が増えている筈ですが、その分若い方々を加えて同じ位の平均年齢となりました。

「平城山」「平城山二」のどちらにも、あとがきで述べておりますが、現代の進んだ文化の恩恵をうけて、自由に旅行をし、テレビなどの映像でいくらでも「気晴らし」ができますものの、それぞれ違った形で苦境におちいった方も少なからず居られますが、木村様も触れて下さいましたような「苦勞する喜び」を持ち、それを支えとして頑張って下さいました。これからもお互いに励ま

し合つて、できれば五年後の「平城山三」を目標に、少しずつでも力をつけて行きたいと考えております。

俳句会は当分、毎月第三木曜に、平城西公民館（神功四丁目バス停すぐ上）で午後から開き、できれば吟行会ももちたいと思います。俳句を出されなくても、お気軽にお覗き下さい。

「平城山二」の中から、一人一句づつ抽出致しましたので、ご笑覧下さい。

「平城山二」の一人一句

笹鳴の谷を境に神ほとけ
三彩の馬に春光あつまりぬ
土中より指に来る音土筆摘む
老鶯や暗峠藪ばかり
赤い羽根一ひら飛びし伽藍かな
一病に耐へつつ春を送りけり
老いし夫作りし膳や寒牡丹
糞虫の顔をみせる石の上

牧野 春駒

伊藤 柳紅

大浦 小枝子

岡 良子

柏原 瓢斎

柏木 一枝

故金田 せき

川口 シズエ

喜多 まさ

手術すむ雪といふ字を掌に書きて

峠茶屋茶代は盆に初景色

三笠山見そなはずやう籬飾る

寒卵添へて琴の譜返さるる

息つめて布地を裁てば萩こぼる

ベルリンの壁削る鬚凍らせて

花時計みな葦立ちて雨至る

墨を磨る音深秋となりにけり

花も見ていつお迎へがあらうとも

犬のまだ眠りこけたる大旦あした

岐阜提灯揺るるは母が来しかとも

流し雛廊に落せし顔一つ

浦祭果てて灯台閉ざさるる

木犀の香りに近き万歩計

水取りの紙衣飾らる写真館

短夜は亡き人恋ひてピアノ弾く

春立つと鏡の位置を少し変へ

引導の袈裟けさが重たし花の雨

裂風や室生の蛙たか昂たかぶらす

木村 長子

込山 山歩

坂本よしゑ

辻田しま代

南村 照栄

西岡 智子

西山佐代子

平井 咲子

故廣田 春

藤澤 陽子

堀池 敏子

三井サチ子

山本 郁代

上原 高美

西田たまみ

森田 陽子

和田美代子

牧野 春駒

牧野 和代

（文化協会会員以外は省く）

拓本を楽しむ会

西島 芳子

これまで長らく『拓本を楽しむ会』の運営や会員の育成その他の発展向上に、色々献身的に御世話下さった渡辺亮斗氏がその会長の座を退かれ、その後任を今年度から込山博介氏が継がれることとなった。そこで、今まで渡辺前会長が毎年投稿されていた「層富のグループ便り」を、今回から会員の回り持ちということになって、私が一番手に指名されてしまった。

とにかく引き受けたものの、一年を通じての会の行事は、もはや定例化してしまって、その活動内容など記したところで、到底前会長の簡略にして要領の利いた文章には及ばない。それで主に私個人の拓本に関する思い出や、採拓にまつわる苦勞など書いて見ようと思う。

よく「拓本をやり始めて何年位になるのか。」と聞かれるが、何時も私は「さあ、はっきり覚えていないけど、三年位かしら。」と答えていた。今まで正確に数えたことがなかったもので、この際にと調べたところ何と丸六年を過ぎていた。もうそんなになっていたのかと驚いたが、

何故か私の実感としては、三年位としか思えないのである。

私をこの講座に誘って下さったのは、会員でも古參組の一人である鈴木玲子さんである。彼女に初めてお盆に掘ってある模様を題材にして、採拓の手ほどきを受けた。だから鈴木さんは私の拓本の先生である。そして、この日、昭和六十三年二月二十五日に『拓本を楽しむ会』に入会することとなった。

翌月の三月三十一日に、会としての戸外での採拓実施に初めて参加することが出来た。場所は、山辺の道の、桧原神社周辺である。私は井寺池の傍に建つ「川端康成先生書」の「大和は国のまほろば、たたなづく、青がき、山ごもれる、大和し、美し」の碑を選んだ。

鈴木さんが側に付き添って色々とアドバイスして下さい、時には手を貸して貰ったりして、ようやくタンポで墨付けするまでにこぎつけた。あとは自分でタンポを叩いたが、その出来映えは何とも御粗末という外はなく、たまたま通りかかれた寛先生が、新聞紙の上に広げられた採りたての拓本を一寸覗かれて、「うむ」とだけで、あとは何にも言われず通り過ぎてゆかれた。それも道理、



拓紙は毛羽立ち、墨の色は濃淡のむらが目立ち、ところどころタンポの丸い形が輪になって紙面に現れ、（これを拓本用語でオダンゴと言う。）鈴木さんは、「初めは誰でもそんなものよ。」と慰めて下さったが、私はすっかり意気銷沈してしまった。

初心者なら初心者らしく、もっと小さな採り易い碑を選べばよいものを、川端康成書に引かれ、記紀の英雄、ヤマトタケルの歌に引かれ、分不相応な碑に挑んだ自分の思い上がりをつくづく思い知らされた。その後何回となく、その辺りの採拓に出掛けているが、この碑だけは今だに敬遠している。

採拓で先ず最初の難関は、拓紙を碑に水張りすることである。拓紙に皺が寄ったり破れたり、一寸風があれば吹きとばされる。びたっと密着させるには相当熟練が必要である。紙張りの練習に何か適当なものがないだろうかと家の中を見廻した末、冷蔵庫の表面を練習台にすることに思いついた。併し冷蔵庫の面は石と違って珫瑯引きなので緻密性が高いから、どうしても細かい気泡が全体に浮き出て中々びったりとはいかない。だが紙を張るだけの練習なので、何枚かの紙を湿らしては張り、張っ

ては剥しているうちに、水張りのブラシの捌き方など少しずつ会得できてきた。私は生来不器用なので、今でも紙張りは上手になれずよく失敗を重ねている。

紙が張れるとその上に布を当て、叩き刷毛で叩いてゆくと、碑の文字の輪郭がはっきり出てくる。張った紙が適当に乾くのを待って、タンポに墨を含ませて碑の表面を軽く叩くようにして打ちつけてゆく。このタンポも、拓本入門などの本に作り方が説明してあるが、殆どである坊主のような形である。石碑は自然石を除いて大体は角型であるから、タンポも丸型よりも角型がよいのではないかと思いつき、色々工夫して苦心の末出来上がったものを、有志の方々に試しに使ってみて貰ったところ、割合に好評を得た。この型はオダンゴもできにくいように思う。

私は自分の気に入った碑に打ち込むほうで、その仕上がりに満足するまで何回もその碑だけを採り続けたのだが、現実にはなかなかそういう訳にはゆかない。第一三枚も採ると疲れてきて、結局最初に採ったのが一番好いことになる。

或る拓本の会の展示会を鑑賞に行った時、出品者の一

人の方が、この拓本を採るのに三十回通ったと言われたが、「へえっ」と言ったきりあとの言葉が出なかったが、その実行力のたくましさに感心してしまった。また、たまたま拓本をとでも上手に採られる方と知り合って、「どうしたらそんなに綺麗に採れるのですか。」と尋ねたところ、「そりゃ五十回より百回やね。」とだけで、それっきり何も言われなかった。要するに数をこなせばよいということかと合点したものの、同じ回数を重ねても或る程度は個人差もあるのではなからうか。

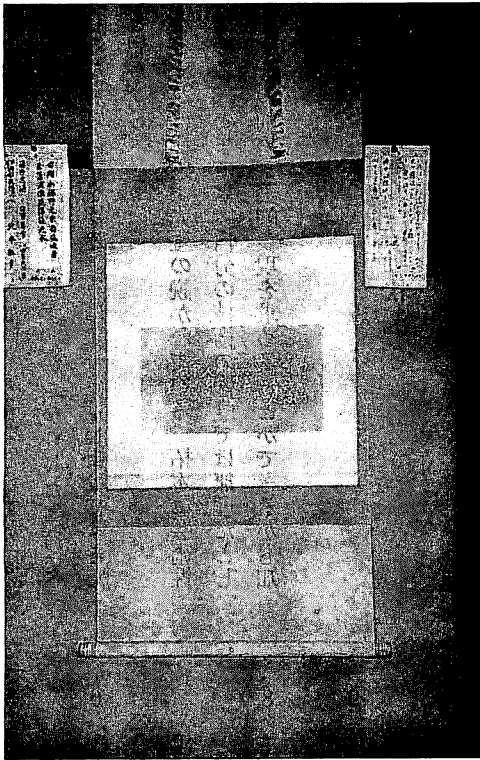
拓本を採っていると、丁度其処を通りかかった人が、立ち止まってじっと見ていたり話しかけられたりするが、「高尚な趣味をお持ちで宜しいですね。」と言われたことがある。その頃私は、拓本は自らの手で書き、画くのととは違って、石に刻まれている先人の書き残されたものを、唯単に上からなぞって、写しとっているに過ぎないのではないかと思ひ、採拓することに空しさを覚えていた。だからその時は、高尚な趣味と言われても、そこから見ればそんな風に見えるのかな。と思つて返事に困った。

或る「拓本入門」という本のなかに、

手拓の技術は単なる複写的な仕事ではなく、「芸術作品」としての手拓技術でなければならぬ。またそれだけに、拓本の仕上げには、それぞれ、それをとる人の手法の個性が現れ、創作的な意欲をこれに打ち込むことができる。と書かれている。

また拓本家として有名な、「内田弘慈先生」は、その著書のなかで、

千数百年前と同じ原始的ともいえる拓法は人の感性の



みで拓されます。だからこそ拓者の感性を拓本は語ります。書は人なりといわれる如く、拓本もまた人なりです。拓本に美的表現を求め、芸術性を求め、生命感あふれた墨の芸術に高めることは深遠です。この一事が理解できるときから拓本技法の進歩が始まります。と書かれている。

私達会員の間でよく拓本の作品を見比べて、「これはAさんらしい拓本やね」とか、拓者の名を聞いて、「ああ道理でやっぱりBさんやと思った。」とか、「へえっこれがCさん？ 一寸何時もの感じと違うね。」などと言っていることがある。同じ碑を採っても、墨の濃淡、採拓の技法の違いなど、その出来上がりは三人三様全く趣が違う。ということはそれぞれ拓本の仕上がりに、個性が現れていて、決してコピーではないと言うことがわかる。

採拓に行つて、目標の碑の前に立った時から、私は好いものを採らねばならないという気持ばかり先走つて、心に余裕がなくなる。自分でもよく分かっているのだが、修養が足

らないので、今でも落着きがない。失敗を恐れず、自然にさからわず、時間を気にせず、ゆったりした気持ちで、楽しみながら拓本を採るように、今後は心掛けてゆきたいと思う。

そうすれば、内田先生の説かれている、拓本に芸術性を求める、とまでは、自分の技術の程度では無理だとしても、その前の、美的表現を求めることができるかも知れない。

平成五年度 活動状況

1 今年度より、込山博介氏が渡辺亮斗氏の後任として会長に決定

2 五月十三日(木)——十四日(金)

下諏訪・水月公園、一泊二日採拓旅行

3 九月二十日(月)

淡路島洲本市(第二文学の森) 日帰り採拓

4 十月十四日(木)

内山永久寺廃寺跡、兵主神社、天理芝公園に分散して採拓

5 十月三十一日(日)——十一月四日(木)

第十一回文化祭に作品展示

6 十一月二十五日(木)

伊丹昆陽池採拓

7 平成六年一月十四日(金)

新年会 ひまわり館レストランエルバにて

8 二月十日(木)

立体拓講習

9 三月十八日(金)

吹田市南千里公園採拓

末筆になりましたが、平成五年十二月二十一日(木)会員の「青山増太郎氏」が急逝されました。

温厚な御人柄で、私はあまり採拓には御一緒することがありませんでしたが、会議の時など皆さんの御話に、静かに耳を傾けておられた御姿が偲ばれます。謹んでその御冥福を御祈り申し上げます。

地酒を味う会

会長 中村 正雄

地酒を味う会一泊旅行記

〔山陽道く瀬戸大橋く屋島く淡路島への旅〕

○月○日（晴）

朝四時三十分起床、五時三十分集合場所であるH氏宅に向かう。

少し雲がある東の空に真赤な太陽がすでに昇りきっていた。

低気圧が近づいているのだろうか、今日、明日の天気が気になる。

バスは、定刻六時出発、ニュータウンを後に阪奈道路へと向かう。

午前七時前にはすでに東大阪線を抜け湾岸線へと入る大阪港が一望に開けてきた。

朝日に照り出された数隻の船がゆっくりと港内を航行し、湾岸沿いには、海遊館、天保山大橋、巨大なタンク群、クレーンと立ち並ぶさまが目に飛び込んで来た。

神戸深江に入り巨橋を渡ると湾岸道路は終わる。この間の眺望はすばらしい。

第二神明道路に入る。淡川を通過、右手に緑に映える六甲の山並が続く。

午前七時三十分、東径百三十五度、子午線通過車の流れは、スムーズ、快調なドライブが続く。

明石子午線エリヤーで、第一回目の休憩をとり、七時四十五分出発。

バスに戻ると、前会長手造の草餅及びビール等の配分があり、スピーカーからは、江差追分の曲が流れだし、実にゆったりとした気分、日常生活を離れての旅の余得だろうか、この間、明石西、加古川、を通過し姫路東より山陽道路へと入る。

車の速度は、八十キロから百キロ程であろうか、この頃になって薄雲が広がって来た。

竜野から揖保川を渡り赤穂を経て、備前インターで、予定コースを変更し、山陽道路をおり、審山インターよりブルー、ハイウェイへと入る。

海が見え始めた、入江が、右に左へと変わる。入江の中にとり残された島々が、印象的だった。

虫明く邑久く吉井川を渡り、君津インターで、ブルーハイウェイは終わる。

早島インターより瀬戸中央道へと入る。山間から瀬戸内海が見え始めた。まもなく瀬戸大橋だ。

午前十時丁度、大橋に入る展望は実にすばらしい。船が白波をけて橋の下を右へ左へと走り去って行く。天気は、高曇りでもやががかっていた。

与島に降り約四十分間の休憩、見学をする。よくもこれだけの建造物を造ったものだ、工事の規模、その雄大なブリッジに驚愕な思いがした。

それにひきかえ、売店、食堂、その他の観光施設は極めて商業的でガツカリさせられた。

買物も食事するきにもならなかった。

午前十時四十五分、与島をあとに瀬戸大橋を渡り四国に入ると、突然おわんを伏せたような讃岐富士が見えて来た。

この山を背にしたように店をかまえる。「さぬき麵業宇多津店」にて昼食、天ざるうどん定食をとる。

腰のある讃岐うどんに舌鼓みしつ、食事時間に少し早目なためか、客は少なくゆったりした店内でくつろぐ、

出発してからすでに四時間が経過している。

午前十一時四十五分、昼食後国道十一号線に入り屋島へと向かう。

沿線ぞいには、麦畠が続く、高松市内を通過、十一号線より分かれ屋島ハイウェイへと入る。料金所を出ると急に登り勾配、かすかにうぐいすの鳴き声が聞こえてくる。トンネルを過ぎると眼下に海が見えた。

午後十二時四十分、頂上に到着、四国八十八カ所八十四番札所屋島寺を参拝、お遍路姿の人々が多く目に付く。

源平の合戦として名高い古戦場を目の前にして、瀬戸内の海、横たわる島々、ゆっくりと通過して行く船、屋島の展望は時間の経過を忘れさせる。

屋島を降り再び十一号線に入り鳴門に向かう。徳島まで六十六キロ、JR高德線と平行して走る。

道路沿いにはすでに田植の終わった田んぼが見受けられ海沿に、牟礼、志度、津田、大内の各町を通り徳島県内に入る。鳴門まで二十二キロ、左に鳴門の海が広がる。水平線までさえぎるものなく続く。

一番札所霊山寺に向かうため折野橋手前を右折、十一号線と分かれ山間の道に入る、山道をゆられること約三

十分靈山寺に着く。一番札所だけあって、お遍路さん、觀光客とかなり賑わっていた。

堂内では遍路に必要な品々がすべて備えられており、会員のうち数名が納札帳を買い求め朱印を押ししてもらっていた。

— 靈山寺を出発、引き続き二番札所極楽寺、三番札所金泉寺へと廻り、今回は八十四番屋島寺を含め四カ所の札所をお参りしたことになる。

午後四時、金泉寺をあとに一路本四連絡道路へ入り、いよいよ最後の海峡大橋である、鳴門大橋を渡る。

橋上からもう潮がそこかしこに渦まいていいるさまが確認された。

このせまい水路に船の往来が激しい、明日の鳴門観潮が楽しみだ。

橋を渡りおえると、淡路島西淡町で、目的地の活造りの里、阿那賀伊毘、民宿「しら波荘」である。

すでに走ること十時間を経過午後四時二十六分到着、夜の地酒の会の宴会を残し、第一日目の旅行行程は無事終了した。

日和にも恵まれ本当に楽しい一日であった。

「旅行によって得られる、独特の利益は、一に魂の自由であり、一にあらゆる人物の収集である。」

|| サムセット・モーム ||

筥作りの会

会員 杉山 啓子

私がこの会に参加させていただいて、この六月で三年目を迎えます。最初から実力以上の筥を、先生の御指導と会員の皆様に助けていただいて、作り上げることが出来ました。日々の生活の中で、「こんな物があれば便利だろうなあ。」とか、「あんなの作れたらいいなあ。」と頭の中に思い浮かべ、楽しみながら作ってきました。これらの筥は、今はもう私の生活にかかすことの出来ない物になっています。

今年も、秋の文化祭を目差し、作品のメインも「季朝筆筥」と決まり、先生のすばらしい筆筥を参考に、少しでもその作品に近づけるよう、自分なりに満足のいける作品を作ろうと頑張っています。(ちょっと意気込みす

ぎるかも知れせんね。ウフフ……)

第二、第四の月曜日の月二回、笑い有り、涙有りのこの会は、どこかの新喜劇顔まけの楽しい会です。自分の自由な時間で作品を作りながら、他方面の知識、(芸術から人生観まで色々)も豊富になることは受合います。一度、気軽に御参加下さい。

園芸の会

北村 孫衛

花も世につれ

昭和五十年前後に植えられた団地内の桜も、今年は雨が少なくて、殊のほか見ごたえがあった様に思われた。

また散歩時に垣間見る家々の草花も育ちがよくて、随分と楽しい思いをされた方も、多いのではないかと、花作りを無上の楽しみとする一人として、よろこびも一人であります。

今年になって我が家では、道路に面したピラカンサの生垣を取払って、吊鉢の出来る様にと、低い垣根に変え

てみました。森林浴が出来る程に茂った庭の縁取りとしての、吊鉢の点景は思いの外の効果がある様に思われます。セラニウム、ペチュニア、インパチエンスなど花期の長いものを主として、季節の花を半月のプラスチック製植木鉢に植えて楽しみたいと、わくわくの此頃であります。

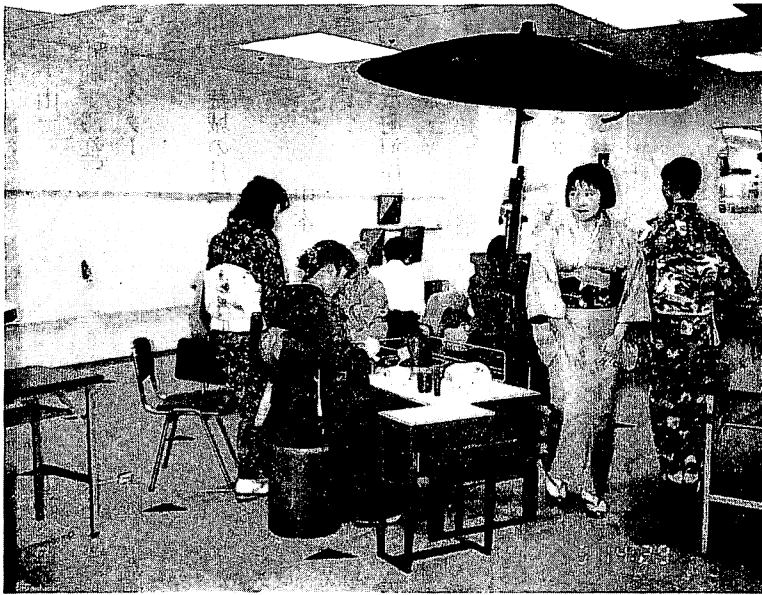
種苗会社発行の雑誌で以前から、壁面園芸の紹介記事をお見掛けすることはありましたが、これは、平家が高層のマンションになった様に、空中の利用は、花作りのスペースの拡大と、本来無いはずのところの花のある楽しさもあります。

教典に「無財の七施」が説かれていますが、花作りはこの教典の教えにも劣らない「和」の心を、人々に与える素晴らしい効用があります。また花には仏が宿ると言われる由縁であります。

花は作りたいがスペースが無いとお考えの皆さん、吊鉢用の壁面ネットを張って、カラフルな草花園芸を楽しんで下さい。

その初歩が、当園芸講座であります。

第十一回 文化祭記録



上演の部

◆木管四重奏

曲目「トリオ」(ハイドン)

平城高校

須山恵理子 前田 有紀 安井久美子

野村 智子

◆詩吟

詩吟の会

ナレーター 木村 堤港

「謫居之作」 西峯 政子 辻田しま代 青山 濱子

柏木 一枝 影山 知子 木村 泰子

榎原 キミ 宗徳 郁雄

「大楠公」 白松 春子 西岡 智子 藤澤 陽子

上田 佳子 津崎美津子 山崎 明

加納 香苗 海野 ミツ 星野 朝子

吉田 輝子 花田 克子 越智 信子

諏訪喜代子

「出郷作」

中井 昭義

「花朝下澱江」

春田 良子

「九段桜」

西尾 弘子

「花朝下瀬江」

青木 光子

「富士山」

中西 勉子

「花朝下瀬江」

大迫くき枝

コンダクター

吉本 堤瑞

◆大正琴

曲目「荒城の月」、「船頭小唄」

川村 君 飯野キヨ子 田中いとえ

中本 むめ 栗山 武子

◆舞踊

「雪の浜町河岸」

久門 富美

「古城」

岡田 利一

◆詩吟

「祝賀詩」

林 直一

◆混声コーラス

団体名 ふれあいコーラス「グリーンブライト」

指導 安藤 幹彦

「野ばら」

(ウエルナー作曲) (混声三部)

「ローレライ」

(ヒルヒャー作曲) (混声四部)

「故郷を離るる歌」

(ドイツ民謡) (混声三部)

◆舞踊

「高砂」

久門 富美

「わがもの」(小唄)

岡田 利一



◆男性カルテット

。トップテナー 神野 真吾
 。リードテナー 吉田 勝
 。バリトン 北村 一重
 。バス 渡辺 重之

曲目

「荒城の月」
 「浜千鳥」
 「赤いサラファン」
 「ふるさとの四季」(童謡メドレー)

◆箏曲

「さくら」、「荒城の月」

沢井箏曲院建部研究室

第一箏 佐藤 育代 オカナ絹子
 城代 康子
 第二箏 好倉 豊子 建部 サチ
 唄 全員

「唐砧」 箏高音 建部 サチ
 箏低音 好倉 豊子

◆能楽

一管 「獅子」 笛 竹本 俊平
 仕舞 「経正」キリ 竹本 理



仕舞 「蟬丸」道行 竹本 千鶴
 一調 「田村」クセ 小鼓 竹本 理

謡 竹本 俊平

◆ 箏 曲

菊池雅千絵箏曲教室

「ちくしちくし」

箏 (本手)

テレサ・ポールン

(替手)

菊池雅千絵

「銀杏の並木道」

箏 (I)

赤坂 秀子 中島 恵子

山内 正子 住山えつ子

(II)

菊池雅千絵

「彩」

(吉崎克彦作曲)

箏 (I)

田頭佳月王 比良 尚美

吉本 康子

箏 (II)

本田美智子 朝倉 康子

「朝の調」(高野喜長作曲)

箏 (I)

菊池雅千絵 朝倉 康子

田頭佳月王

箏 (II)

本田美智子 比良 尚美

吉本 康子

展 示 の 部

前 期 十月三十一日〜十一月四日

◆ 拓 本

渡辺 亮斗 青山増太郎 宇野木久代

寛 裕 寛 英美 喜多 正恵

北本 敏子 込山 博介 沢田 実子

白松 春子 鈴木 玲子 宗徳 郁雄

高橋はる江 竹本 千鶴 土井 正子

中村 弓子 南村 勝次 南村 照栄

西尾 弘子 西島 芳子 西山佐代子

広田 省吾 堀池 光合 堀池 敏子

山田 正子 牧野 春駒 牧野 和代 伊藤 柳紅

大浦小枝子 上原 高美 岡 良子

柏木 一枝 川口シズエ 喜多 まさ

木村 長子 込山 山歩 坂本よしゑ

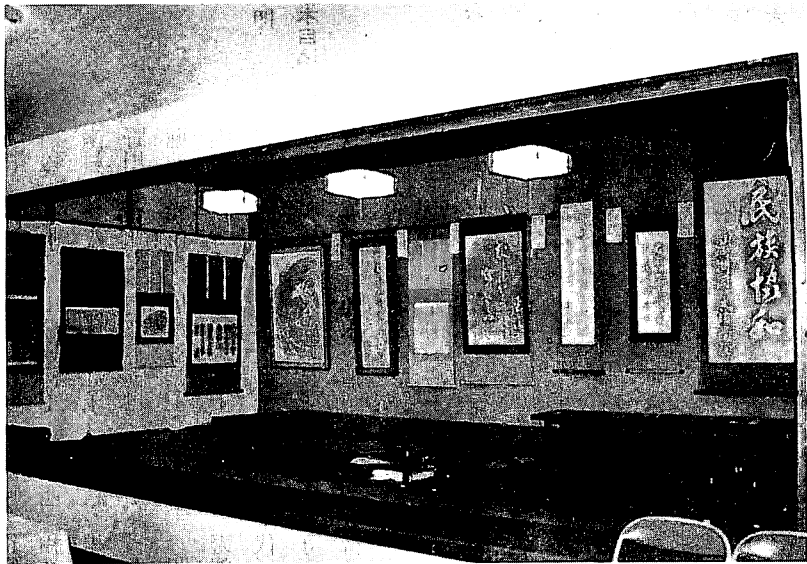
辻田しま代 南村 照栄 西岡 智子

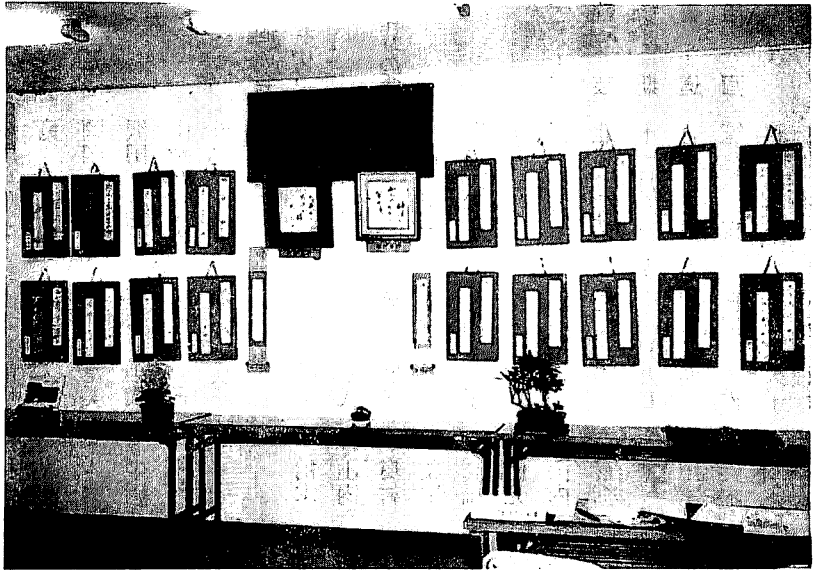
西田たまみ 西山佐代子 林 五郎

藤澤 陽子 堀池 敏子 三井サチ子

◆ 俳 句

- ◆短歌
 森田 陽子 山本 郁代 和田美代子
 岡田 越子 宇野木久子 大浦小枝子
 沢田 実子 久門 富美 木庭 和子
 山崎たみ子 玉置 小代 中川都哉子
 藤原 香 永谷 敏子
 松尾すみ子 棉源 暎子
- ◆地酒の会
 日本酒ラベル
 柴田八重子 大谷 桑子 柏木 一枝
 喜多 まさ 辻田しま代 山内 梅乃
 中野 昭三 榎原千鶴子 奥村 淳子
 北村 源子 木村 長子 柴田 静枝
 菅原 静子 杉山 啓子 高橋 笑子
 土井 正子 山内 梅乃 山元 洋子
 山内 梅乃
- ◆デコパージュ
 杉山 啓子 榎原千鶴子 山内 梅乃
- ◆園芸
 北村 孫衛 松岡 禮一
- ◆後期
 十一月五日、十一月九日
- ◆書道
 竹本 千鶴 田室 西崖 田室美智子
 梶野 哲 青木 光子
- ◆絵画
 石崎 路子 宇野木久子 岡本 幸子
 柏原 愛子 小西 淑彦 込山 嘉代





- ◆園 芸 北村 孫衛 岡田 越子
- ◆木 彫 井ノ山一雄
- ◆テコバージュ 杉山 啓子
- ◆皮工芸 高橋 笑子
- ◆はんでん 山内 梅乃
- ◆パッチワーク 西山佐代子
- 松本 良子
- 鈴木 幸子
- 打田 照子
- 榊井 恵子
- 西本万優美
- 菅原 静子
- 伊藤喜美子
- ◆木目込人形 谷口 直子
- ◆押 絵 山田 敦子
- 堀池 光合
- 野川 善和
- 南村 勝次
- 白松 春子
- 沢田 実子
- 山口 直子
- 青山 浜子
- 木村 長子
- 鈴木 清子
- 林田 〆子
- 安田 清子
- 榎原千鶴子
- 西川一三恵
- 三輪 久恵
- 根来 良子
- 山田 正子
- 村岡ちい子
- 服部 純世
- 西尾 弘子
- 出口真喜子
- 沢田 昌江
- 石森千代子
- 島田 守恵
- 西岡 智子
- 藤村 芙美
- 周藤 智子
- 林 美智子
- 山元 洋子
- 堀池 敏子
- 山田 寿郎
- 山崎 明
- 広田 省吾
- 仁科 里子
- 中西 和江
- 島川 正行

1994年度（平成6年度）

平城ニュータウン文化協会総会

日 時 1994年5月22日（日）PM 1：30～

場 所 奈良市北部出張所

I 開会の辞

II 会長挨拶

III 来賓祝辞

IV 議長選出

V 議 事

- (1) 1993年度事業報告の件
- (2) 1993年度決算・監査報告承認の件
- (3) 1994年度事業計画（案）承認の件
- (4) 1994年度予算（案）承認の件
- (5) 新役員選出の件
- (6) その他

VI 閉会の辞

第12回総会記念講演

『舎衛城跡の発掘』

— スライド上映 —

講師 関西大学教授

網 干 善 教

1993年度 事業報告

- 1993年 4月3日 常任理事会開催
 15日 協会報発行 全戸配布
 5月9日 第11回('93年度)総会
 記念講演「山辺の道」の遺跡 網千 善教先生
 15日 春の大和路見学
 「山辺の道」現地説明 網千 善教先生
 30日 神功・右京地区歓送迎会
 6月1日 ニュース1号発行
 7月1日 デコパージュ1日講習
 25日 チャリティーコンサート音楽の夕べ協賛
 8月1日 ニュース2号発行
 9日 刺し子1日講習
 29日 常任理事会
 9月10日 ニュース臨時号発行
 26日 右京小学校運動会出席
 30日 観月会
 10月2日 秋の大和路見学
 「香芝市・傍丘(かたおか)」方面 現地説明 網千 善教先生
 4日・18日 和裁(半てん)1日講習
 10月15日 文化協会報発行
 協会誌「層富第10記念号」発行
 10月31日～11月9日まで 文化祭開催
 31日 記念講演
 今日の日本経済 ― その歴史的 position と課題 ― 橋本 輝彦先生
 31～11/4日 前期展示の部
 拓本、短歌、俳句、写真、園芸、^{はこ}管作りの会、地酒の会
 11/5～9日 後期展示の部
 書、絵画、手芸、押し絵、木目込み人形、パッチワーク、園芸
 11/3日 上演の部
 室内楽、詩吟、大正琴、舞踊、箏曲、男性カルテット
 コーラス、仕舞、謡曲
 3日 お茶席開催
 11/7日 囲碁大会
 11/9日 ごくろうさん会
 11月14日 ニュース3号発行
 12月16日 ちぎり絵特別講習(千支) 柴田 八重子先生
 17日 新春を祝う会の打ち合わせ会議
 1994年 1月5日 ニュース4号発行
 9日 第11回「NT新春を祝う会」参加
 3月5日 ニュース発行

1993年度 決算報告

平成5年4月1日～6年3月31日

【収入の部】

(単位：円)

項 目	予 算	実 績	増 減	備 考
前年度繰越金	359,838	359,838	0	
会 費	495,000	516,000	21,000	@ 1500×344
後 援 費	114,000	90,000	△24,000	各自治連合会より
寄 付 金	5,000	28,600	23,600	講師先生より、他
雑 収 入	6,162	63,842	57,680	銀行利息、懇親会余剰金、茶券収益金
合 計	980,000	1,058,280	78,280	

【支出の部】

(単位：円)

項 目	予 算	実 績	増 減	備 考
事 業 費	100,000	76,500	23,500	文化祭、セミナー
助 成 金	63,000	63,000	0	講座、同好会
会 議 費	40,000	0	40,000	
広 報 費	500,000	425,080	74,920	会誌、会報、ニュース
事 務 費	20,000	17,686	2,314	事務用品、他
印刷、消耗費	160,000	72,800	87,200	コピー機修理代
通 信 費	15,000	1,920	13,080	郵便料
渉 外 費	10,000	17,000	△7,000	協賛費、祝金等
雑 費	50,000	27,306	22,694	
予 備 費	22,000	0	22,000	
小 計	980,000	701,292	278,708	
次期繰越金		356,988		
合 計	980,000	1,058,280		

合 計 監 査 報 告

1993年度会計につき帳簿・証票など監査した結果適正であることを認めます。

1994年3月31日 監 事 大 浦 小 枝 子 ㊟

監 事 渡 邊 亮 ㊟

1994年度 事業計画

— はじめに —

当「協会」は、地域での日常的な文化活動を通して、地域コミュニティー・住民の親睦と和を実現していくために、当時の自治会・連合会の「街づくり」の方針のなかで結成推進されてきたものです。

この設立趣旨にそって、地域住民の多くの方の、参画を期するとともに、会員の研究、創作発表、相互の交流等の場としつつ、地域文化の発展に、寄与することを基本としていきます。

また地域三自治連合会をはじめ、スポーツ協会、教育懇談会、地区社会福祉協議会などの各団体の活動とも連携して、ひきつづき「街づくり」に貢献していきます。

— おもな計画 —

1. 講演会の開催

総会記念講演 文化祭記念講演

2. セミナーの開催

3. 会誌『層富』の発行

4. 会報の発行（全戸配布）

文化協会案内号 文化祭案内号

5. ニュースの発行 隔月発行予定

6. 大和路見学会 春1回 秋1回

7. 文化祭の開催

8. 観月の夕べの開催

9. ちぎり絵1日講習会

10. 平城ニュータウン新春を祝う会

11. その他

会の発展を期しての工夫など会員各位の、提案、役員会決定などにもと
ずき適宜事業を推進したい。

1994年度 予 算

【収入の部】

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	356,988	
会 費	510,000	@ 1500×340
後 援 費	90,000	各自治連合会より
寄 付 金	10,000	
雑 収 入	33,012	銀行利息他
合 計	1,000,000	

【支出の部】

項 目	金 額	備 考
事 業 費	100,000	文化祭、セミナー他
助 成 金	63,000	講座、同好会への助成
会 議 費	20,000	会議、資料、他
広 報 費	500,000	会誌、会報、ニュース他
事 務 費	20,000	事務用品
印刷、消耗品費	80,000	印刷機器消耗品、コピー
通 信 費	15,000	郵便料、電話代
渉 外 費	25,000	祝儀等
雑 費	50,000	各項目に該当しない必要経費
積 立 費	100,000	印刷機器買い替え費（別会計）
予 備 費	27,000	
合 計	1,000,000	

1994年度 平城ニュータウン文化協会講座・同好会一覧

電話局番 = (71)

	番号	講座・同好会	担当者	電話	曜日・時間	予定会場
定	1	歴史教養講座	網干 善教	6510	第2火曜(10時~12時)	北部出張所会議室
	2	古代史講座	鬼頭 清明	2997	概ね第4火曜(14時~16時) 間合わせ 木庭(71-3494)	“
	3	園藝同好会	中村 正雄	0106	毎星期日(13時~18時)	平城西公民館和室
	4	木目込人形・押絵同好会	(窓口) 菅原静子	3635	第1・3水曜(10時~14時) 指導・谷口直子	北部出張所会議室
	5	読書会	大橋 一二	4501	第4日曜(10時~12時)	“
	6	中国語講座	久富木 幸子	5015	毎週水曜(9時半~11時) 間合わせ窓口は坂陽子(71-3468)	“
	7	詩吟の会	大迫 くき枝	2533	第1・2・3水曜(13時~15時)	“
	8	地酒を味わう会	中村 正雄	0106	第2土曜(18時半~)	会場不定
	9	園芸の会	北村 孫衛	0823	第4月曜(13時~16時)	自宅(右京4丁目7-5)
	10	拓本を楽しむ会	込山 博介	5058	毎月1回(日時・場所はその都度 事前に会員に通報)	北部出張所会議室
	11	絵画の会	梶野 哲	3295	第1・3・4・5火曜(10時~12時) 第2火曜(14時~17時)	“
	12	俳句入門 (平城山句会)	牧野 春响	1777	第3木曜(13時半~16時) 間合わせ 西山(71-4950)	平城西公民館和室
	13	短歌を楽しむ会 (平城山句会)	網干 善教	6510	第3火曜(13時半~16時) 間合わせ 木庭(71-3494)	北部出張所会議室
	14	フランス語講座	高橋 節子	8253	毎月曜(10時~11時半)	“
	15	山歩きの会	西幹 友雄	6102	第2日曜(雨天中止の場合は第3 日曜)	野 外
	16	英語講座	ハルエ 鍛田 時栄	3150	毎週土曜(10時~11時半)	平城東公民館
	17	万葉講座	松岡 禮一	2964	第1月曜(13時半~15時半) 第1水曜(19時半~21時)	北部出張所会議室
	18	… … 歩く会	(窓口) 広田省吾	0207	奇数月第3金曜日、偶数月第3日曜日	野 外
	19	宮(はこ)作りの会	中野 昭三	3258	第2・第4月曜(10時~16時)	北部出張所会議室
	20	野草をしらべる会	前川 良雄	0682	春・夏・秋年に3回程度	野 外
	21	パッチワーク研究会	(窓口) 山元洋子	5138	第2・第4金曜(1時~) リーダー 打田	北部出張所会議室
不 定 期	22	源氏物語研究	☆ 浅田 知里	1258	希望者は電話で申し込んで下さい	“
	23	星を見る会	☆ 此下 享	3377	開催時、ポスター等で広報	北部出張所 会議室前
	24	写真同好会	☆ 梶野 哲	3295	希望者は電話で申し込んで下さい	北部出張所会議室
	25	アマチュア無線の会	☆ 浅田 旭彦	1258	希望者は電話で申し込んで下さい	“
	26	「子どもの生活」研究会	加藤 育生 北村 雅子	5223 0753	希望者は電話で申し込んで下さい	“

会 則

第一章 総 則

第一 条 この協会は、平城ニュータウン文化協会という。

第二 条 事務局は、平城西公民館に置く。

第二章 目的及び事業

第三 条 会員の研究・創作発表、知識の交換並びに会員相互間及び他の文化団体との連絡提携の場となり、総合文化に関する進歩普及をはかり、地域文化の発展に寄与することを目的とする。

第四 条 前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 講演会・研修会・展覧会・発表会・文化講座等の開催。
- 2 関連文化団体との連携及び協力。
- 3 研究の奨励及び研究業績の表彰。

4 会誌の発行。

5 その他目的を達成するために必要な事業。

第三章 会 員

第五 条 平城ニュータウンに在住又は勤務する者で、協会の目的に賛同する者とする。会員の種別は次のとおりとする。

1 正会員 年間会費 一、五〇〇円

但し、高校生 五〇〇円

2 賛助会員 この協会の趣旨に賛同する者で、年間会費 五、〇〇〇円以上納める個人又は団体とする。

第四章 役 員

第六 条 協会には次の役員を置く。

会長一名、副会長三名、常任理事若干名、事務局長一名、事務局次長一名、会計一名、理事若干名、監事二名。

第七 条 理事は、正会員中より選出する。

二、会長、副会長、常任理事は理事の互選で定め、総会の承認を得る。

三、事務局長、事務局次長、会計は理事中より会長がこれを選任し、総会の承認を得る。

四、監事は会員中より二名選出する。

第八條 会長は協会を代表する。

二、副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは代行する。

三、理事は理事会を組織し、協会に関する事項を審議し執行する。

四、常任理事は理事会の決定に基づき業務遂行に当たるとともに、総会で決議した事項を執行する。

五、事務局長は会務の遂行に関する理事会、常任理事会等の決議に基づき全般の事務連絡処理に当る。

六、事務局次長は事務局長を補佐する。

七、会計は会計事務を処理する。

八、監事は会計帳簿を監査し、通常総会において報告する。

第九條 顧問・参与を置くことができる。顧問・

参与は理事会の同意を得て会長が委嘱する。

二、顧問・参与は会議に出席して意見を述べることができる。

第十條 役員は任期は二年とし、再任を妨げない。

二、補欠により選出された役員は、前任者の残任期間とする。

三、役員はその任期満了後でも、後任者が就任するまで、なおその職務を行う。

第五章 会 議

第十一條 理事会は必要に応じ会長が招集する。但し、理事の三分の一以上から会議の目的を示して請求のあったときは、理事会を招集しなければならない。

二、理事会の議長は、会長又は会長の指名する者とする。

三、理事会は、理事の二分の一以上出席しなければ議事を開き議決することができない。

四、理事会の議事は、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

4 その他理事會において必要と認めたる事項

第六章 會計

第十二条 常任理事会は、会長、副会長、常任理事、事務局長、會計によって構成し、必要に応じ会長が招集する。以下理事会に準ずる。

第十五条 経費は會費並びに補助金、寄付金、その他の収入による。

第十三条 通常総会は、毎年一回会長が招集する。臨時総会は、理事会が必要と認めるとき会長が招集する。

第十六条 會計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第十四条 総会の議長は、總會出席者の中から指名する。

第七章 會則の変更

第十五条 次の事項は通常總會に提出して、その承認を受けなければならない。

第十七条 この會則は、總會の議決を経なければ変更することができない。

第十六条 總會の議事は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第八章 補則

第十七条 次の事項は通常總會に提出して、その承認を受けなければならない。

第十八条 この會則施行についての細則は、理事会の議決を経て別に定める。

第十八条

第十九条 この會則は、昭和五十八年二月二十七日から適用する。

第十九条

1 事業報告及び収支決算

2 會計監査報告

3 事業計画及び収支予算

